

川柳の雅証

麻生路郎☆主宰



十月號

No. 377 Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

昭和十三年十月一日發行 第三十七號
（每月一回 日曜刊） 創刊大正十三年・通卷三百七十七號

—11月本社句会—

日 患 和
記 者 服

兼題

川柳雑誌社主催

本社十月句会

四年連続の豊作です

あなたの川柳の実りにも大きな期待がかかっています
作句によし静かな、秋の夜を楽しみましょう。

日時 十月七日(火)午後六時
場所 光明寺 (電話の九二六〇)

大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前
(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

兼題

「家風」(二句)

藤生路郎 選

「日帰り」(三句)

川村好郎 選

「小鳥」(三句)

丸尾潮花 選

「底値」(三句)

八木摩太郎 選

席題

三題(当日発表)

柳話

中島生々庵

呈賞

☆各題天位 ☆路郎選天位に不朽洞賞

会費 五拾円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・開佑・狂二・

与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・永断・一三夫

★ 投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切毎月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電話住吉 六〇八一番

畳の中のお掃除まで

完全にお掃除

- ・吸じん力がつよい
- ・防音装置が完全
- ・軽くて取扱いが簡単
- ・ゴム製の自在コマで移動が自由自在

電気掃除機は



SC-100型 300ワット 現金正価 15,500円

応用部品 7点1組 現金正価 2,400円

三洋電機株式会社

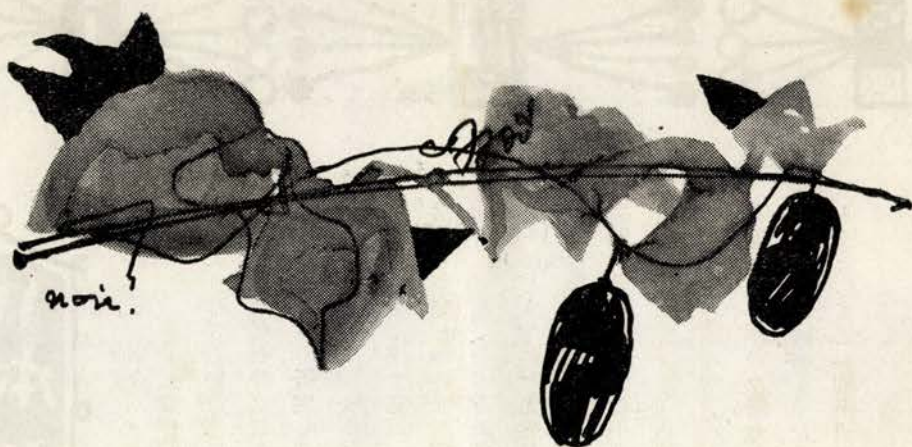
9月28日→11月23日

見渡し菊人形・33場面
風雪につぼん
松竹歌劇団松崎組出演
ワンダフル日本
グランドレビュー・全23回
入場料 130円こども 65円



あやめ池大菊人形

主催・毎日新聞社



不朽洞句帖

麻生路郎

そこへ行くようにモスクワへ行く若さ

三等で行くと学者はわるびれず

としよりの会はやほよほよと寄り

死にそうになし会長におされてる

舞奏師匠太れるだけ太り

秋の庭キヤッチボールの音のみす

台風もカンナたおれただけですみ

一九五八・十月

十月号目次

題字……………麻生路郎
表紙……………野尻弘

不朽洞句帖……………麻生路郎……………(一〇)	かいしよもん……………堀口 塊人……………(二〇)
米国川柳通信……………築山快夢……………(二二)	新川柳鑑賞……………麻生路郎……………(二二)
古本屋の生活から……………長野 文庫……………(二七)	私本柳樹へ招待……………布部 幸男……………(二八)
隣りは何をする人ぞ……………須崎 豆秋……………(二九)	お隣り二題……………正木 木客……………(二九)
梶原景時・景季……………富士野鞍馬……………(三〇)	ライバルは絶えない……………田垣 方大……………(三〇)
狸が選んでいる男……………金井 文秋……………(三一)	須崎豆秋論……………高鷺 亜鈍……………(三一)
川柳歳時記……………木谷 竹莊……………(三二)	「ま」と云うこと……………戸田 古方……………(三二)
毎日柳壇へお誘い……………早川 清生……………(三三)	善風春の横顔……………橘高薫風子……………(三三)
柳風三同志……………東野 大八……………(三三)	不朽洞の人々……………瑞川氏の巻……………(三九)
三味線と川柳……………山川 阿茶……………(四〇)	夢の初対面……………杉本 一鶴……………(四〇)
わが喜びわが願い……………沢田 美喜……………(四一)	修養に窓口談義……………久米奈良子……………(四二)
売店の句から……………不二田三夫……………(四二)	★
川柳塔……………麻生路郎選……………(四四)	同舟近詠……………諸 家……………(四九)
近作柳樹……………麻生路郎選……………(五〇)	北川春集選……………(五〇)
一路集「ミシン」……………小西 無鬼選……………(五一)	八木摩太郎選……………(五一)
金泥集……………麻生設乃選……………(五二)	各地柳壇……………(五三)
不朽洞会から……………(五九)	柳界展望……………(五八)
青ベン・赤ベン……………(四六)	



豊中市 戸田古方

おおよなこというてもスボンサー

死は休息などひとことのうに

偶像はあつさり否定してみたが

大阪市 西尾 葉

首洗池蛙観海流で逃げ

落第も亦楽しからずや座談会

大阪市 市場 没食子

ストはこうやれと先生見本見せ

職のない者は来れと自衛隊

薬局が呉れた産制の小冊子

大阪市 土井文蝶

入院中の句

看護婦さん浮いた話もないままに

不浄門また同病が冷たく出

入院をしてても約手迫って来

西宮市 若本多久志

はたら
もう二十言うてもきかぬ娘に育ち

倅の一つ先祖の墓詣り

泥坊に這入られた犬しゅんげとり

大阪府 川村好郎

研究会メモして帰りそのまんま

押入れも嫁った娘の香が残り

アルバムにはつときますとそのまんま

二本目のビールは客へ見せただけ

米子市 三鴨美笑

出来ぬこと知っててむりな金も借り

真裸夏はいいなと横になり

長男が次男に負けている将棋

ハセ釣りに子供の世話で疲れ切り

大阪市 松江梅里

別居した当座は意地の估券のと

冷房も完備きれいな娘も揃い

冷房でしのぎを削る夏の陣

大阪市 正本水客

強情に病む身が別居主張する

ブラカードいつの間にやら見えなくなり

大阪市 丸尾潮花

ぶった目のあった袂の柄もあせ

心中さえ出来ない恋を抱いて病む

兵庫県 小西無鬼

城崎にて

お向いが未だ踊ってる床につき

スードショウ覗きに行くも旅のこと

大阪市 西いわを

鉄筋のお堂で木魚よくひびき

潔癖の父へ頼んだ蟬たたき

熱海にて

ロカビリー飛出しそんな熱海の湯

ホノルル市 内藤草一郎

夜の雨電気時計は音もなく

折り悪しく雨がトマダム軽るく酌ぎ

東京都 宮田不二

ワンドフル嬉しく走馬灯を提げ

俊寛に通じて錦魚しずかなり

子を叱るだけの芸とは母淋し

大至急に願えば職人いそがない

さもあらばあれ孝行の美しさ

ホノルル市 白砂旋風

誕生日のコソ泥今日はウイスキーを盗り

巡査の家に泥棒腹が痛いほど笑い

大阪市 須崎豆秋

✓ 冷房を歩きまわって買いもせず

汗淋漓暑中見舞を配達し

カナリヤがびつくりラジオホームラン

ホノルル市 羽佐間柳葉

アイデアがないとは男憐れなり

人生の味は人との摩擦なり

豊中市 福田安夢

これが現実さ週一回の生ビール



君なげくなかれお伽話を信じよう

大いなる事実一年定期がもう切れる

堺市 吉田圭井堂

ストされて定期見せるも憂とましく

不良よりましと割り切る音楽部

宇部市 国弘半休

さびおとす労働もあり造船所

人生の二死満塁があっけなく

岡山市 直原七面山

大工さん自作の棺でゆこうとは

蜘蛛の巣にかかりもがいてみたいなり

惜別へ女会釈を呉れただけ

浴びる程飲ませて商談まともらず

大阪市 西森花村

警棒の痛さを社会科で教え

かくれんぼの様にタンス屋案内し

誘蛾灯光の下に死ねと言う

鳥取市 河村日満

ミスワールドと同じポーズで娘も写し

蚤取ってもとの寝息にはやい妻

夕風へ浴衣のすその揺れもよし

下関市 石川侃流洞

サックドレス芋虫に似て面白し

借電話ハイハイとだけで済み

割勘へ損をせぬのがいて困り

倉敷市 木村千容

入院

ドック入りした人間は素直です

バリウムを呑む暗室の地獄めき

ゴム管を嚥下む間老婆ソッポ向く

回生の自信つく

莊重のかおして老患ハエをうち

倉敷市 田垣方大

社運今日怒声のもれる社長室

引張って押して集金諦める

加賀市 野村味平

この人にこんな芸がありオテモヤン

能登観光

来て見れば能登はやさしや船かい漕ぐ

大阪市 木村水堂

十代を意識している海水着

無理出来ぬ齡と悟った大掃除

浮気など出来ぬ夫と見抜いて居

盆おどり妻の器量がよく目立ち

高槻市 福田丁路

殺し屋の思いもよらぬ優男

夢の間に過ぎた結婚適齡期

何不足なしに育って紅連隊

大阪市 真鍋一瓢

今日も朝から権利主張の音がする

齒痛

アルコールが造る唯我独尊とは淋し

銷夏法僕には妻の里帰り

大阪市 佐野白水

課長級移動

変り映えせぬ金銀を置き変える

成り駒のように兼任命ぜられ

松島にて

これでもかこれでもかと松島の景変り

大阪市 後藤梅志

六十になって二号がほしくなり

バチンコとあまりかわらぬプロ野球

吊り革に下って眠るこつおばえ

線香をつけるライターでもありき

幼女ひろ子の死

目に見えぬ糸に呼返えされて逝き

米子市 小西雄々

かつぎ屋の機敏な動作にみとれたり

モーニング悲しい記憶だけ残り

大阪市 吾郷玲人

海浜に生まれ山岳部に属し

懲らしめのクスリが効きすぎて来て慌て

大阪市 山川阿茶

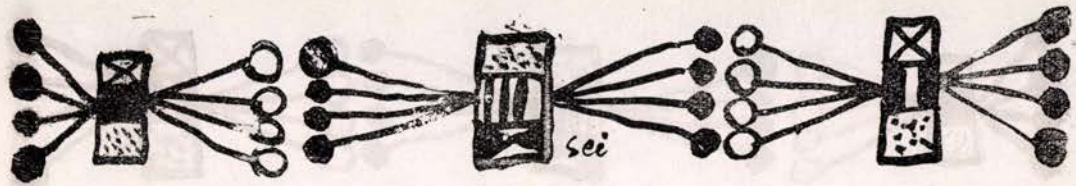
マネキンも帰り仕度の化粧する

足だけが一番白い秋立つ日

心臓で弾く三味線は二が下がり

刀傷治れば元の愚連隊

大阪市 金井文秋



悪遊びをする閑もある勞基法

退職金特技のいらぬ店を出し

小松市 伊藤 茶仏

靴下の穴を久しいものにみる

夢にまであわれ逆手を取られとり

末ッ娘に男臭いとからかわれ

防府市 長野 井蛙

ハンサムにマダム残りの火をもやし

裏があり涙があると法を枉げ

役得の席では斗酒もお辞せず

奈良県 尾崎 方正

政略結婚売春よりはちと高く

加賀市 那谷 光郎

看護婦に居留守つかわせ二日酔

下戸の猪口右に左に酌を逃げ

鳥取市 大西 八歩

妻の座も久し未だ見ぬ富士箱根

お悔みがはつきり云える年となり

一男一女もやがて嫁ぐ身の

水明の地は青年に住みにくし

夏がれの日課風呂たきとは淋し

運根鈍根に横道多すぎて

面白いところで破れてる古雑誌

大阪市 北川 春巢

髪分けた法衣が潤歩するお盆

浪曲の人情論と取り合わず

帰郷

ふるさとの水も水道なまぬくし

岡山県 浜田 久米雄

祭からはや帰っていい養子

✓ 飲ける口持って養子に来てしまい

御機嫌をとれば養子はほくそ笑み

大阪市 武部 香林

健康を自負した友と医者で逢い

お喋りを除けそのうた市場籠

出雲市 尼緑 之助

五十過ぎ分別くさい顔で呑み

オールスター戦

団体で来て憚らぬ出雲弁

大阪市 水谷 竹莊

はした株もって株主ともいえず

若い妻持つて先生気がひける

西宮市 小沢 史葉

腹の立つ事よ赤電話の長話

能登半島にて

ローカルのここにも源平の歴史聞く

平家が落ちた道を今はバスで行き

尼崎市 小林 文月

ガールフレンドサックドレスを今日は着て

孫多き妻の未練の宝くじ

大阪市 富岡 淡舟

低音の母の叱言が身にこたえ

里帰り肥えて居るから安堵した

岡山県 福島 鉄児

サックコートクチャクチャにして子を背負い

マダムの眼に僕が坊やとしか見えす

岡山市 服部 十九平

ボート屋を心配さしている二人

夏暑し土建業者の金指輪

尼崎市 長谷川 三司

首のない同志で飲んで気焰なり

いいおばあさんだったと近所死んでから

西宮市 若林 草右

ローカル線故郷と同じ田の匂

血圧を気にして瘡で死んでゆき

順々に上着をまわし焼香す

豊中市 足立 春雄

たのまれた人から先に死んで行き

雑魚のトト交り床柱が小さく見え

熊本県 有働 芳仙

子をみんな寝かして妻の顔になる

壁土の様に白粉落ちて朝

男から墮ろして呉れと拜まれる

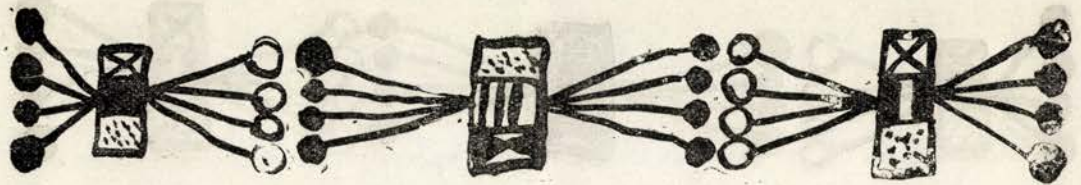
けちんぼの旦那にあんたはよう続く

大阪市 山本 葉光

井戸水のおしほりだなど客の鼻

押かけの獅子舞毛が抜け金歯はげ

倉敷市 水谷 谷水



うちの女中よとは哀れな後妻なり

メッセンジャガール如きに振られとり

玉の輿どこか女囚に似て淋し

岡山県 田村 藤 波

殺された酒乱の父に味方せず

反省はすれどまともにあやまれず

岡山県 岡田 夜 潮

ラジオかと思えば夫婦げんかなり

与って力あるけど酔け過ぎる

玉島市 臼井 三 林 坊

おっさんと云われてハツとする歳さ

木馬館阿呆の様な父になり

茨木市 下山 清 潮

盆おどり一寸の広場見つけ出し

打水へベタルの足を揚げてぬけ

岡山県 本田 恵 二 朗

松林古老のようなのが一本

売れっ妓のお酌うやうやくうける

京都市 松川 杜 的

階段で師匠の恋を見てしまい

ガリ刷へ文才ちよっぴりひらめかし

豊中市 村上 ゆ ず る

あの人もよろめきらしい終電車

女一人生きる強さがふとくずれ

鳥取市 森 本 法 泉 子

ウインドに出せば去年のものも売れ

酒くさい息がしそうな電話口

三徳山皆成院にて

当山の名物成る程冷どうふ

葦酒牌山門に入り夜を更かし

倉敷市 松村 万 古

献灯がくの字への字の裏参道

残業の夫に済まぬ夕涼み

尼崎市 藤 井 春 日

嫁ぎ来て値切らにや損と知り初め

その気ならとさも飲み込んだ様に言い

私財あるので赤字それほど苦にならず

岡山中 津田 麦 太 楼

祇園囃子青田の風に乗って来る

肌着売場二号の尻に従いて抜け

足の蚊を足で追ってる屋台店

手の焼ける方ですのよと二号言い

吹田市 橋 本 幸 男

母に負け夫に負けてまらうゆき

四十年無口であった妻が死に

堺市 高 崎 雄 声

貧乏はいやと逃げてくイヤリング

心臓の弱い養子を探して居

軍国は亡びても尙拳手の礼

島根県 藤 井 明 朗

お人好しほんとを言うてもめさせる

遠花火独酌の淋しすぎ

祝盆の二次会までは覚えて居

愛人もないのに半ドンさつと去に

岡山県 永 松 東 岸

げんこつ位は先生に頼んどき

お留守へも来て坊さんの拝む盆

倉敷市 野田 素 身 郎

盆踊墓参もせずに夜を更し

今日セツとした髪こわさないでほし

知らぬ間に二人一里も歩いたり

大阪市 清 水 望 峯

浮草のように暮して見たい夏

ネオンの灯親には誘蛾灯に見え

大阪府 川 端 鬼 醉

パンガロー隣も星をほめている

四明ヶ嶽昔は一汗入れた所

愛情やろか男の白毛気にかかり

なれ初めの弱身でしりに敷かれ詰め

大阪市 木 村 十 悟

罰金で事足る罪だからやめず

小会社の社長もゴルフへ通うなり

悪の巣になるコーヒー屋のうす暗く

大阪府 伊 達 堰 子

蟬取の連が並んだ枕元

晩飯へどこかの猫が又座り

おばはんと呼んで答える妻となり

カスバ山王町

税金の積りとボン引すぐ納め

大阪府 不二田 一 三 夫

✓ 帽子かと思えばハンドバッグなり



産婆もう望ろしのほうで食うと決め
逢びきの伝言板はクイズめき

兵庫県 酒井ひか平

残り香を追い出す様に仲居掃き

宇部市 津秋六花

ナイターで赤線に居たらしいのが話しかけ

農地開放以前の身分いいたがり

悪戦苦闘男無口になって来る

神戸市 野村初甫

女よし振動もよし旅のバス

顔ずらりうるさい故郷で結婚式を挙げ

岡山県 池田古心

五十年修理のきかぬ身とはなり

東京都 石居高志

さし向いやつと女の顔になり

怒ってる顔でやっぱり会いに来た

岡山県 土井雷山

ハンサムを口説く喫茶のドアを押し

ひとり言留守の我が家へ腹を立て

松江市 勝谷山川児

中元が量より質の課へ替り

夫婦して補欠の息子を送りに出

大阪府 早川清生

天狼の二句組に支部組合長

仲居して育てた母を嫌いぬき

不渡の苦衷二号にだけ話し

お勤めのママにある夜の酒の息

堺市 辻圭水

怪談を聞きたいようなむし暑さ

高野山勿体なくも風邪をひき

簡単にと言った挨拶まだすまず

加賀市 中松恒雄

樹の陰へ陰へと日備道普請

野放しの松はすすくすくと伸び

西宮市 小浜牧人

浴衣がけ社長話せる顔になり

母親を攻めた余勢で父も落ち

同棲をしてケチ臭いのに気付き

西宮市 菱田満秋

一通り来たらバツタリ見舞絶え

親のないのが孝行をせよと言う

浪費家と知らず気前のよさに惚れ

兵庫県 前川左文字

サックドレス都会の風を孕んで来

分譲地神が作りし土地じゃろに

岡山県 池上知恵美

サーピスに貰うた金魚だけ残り

蟬しぐれ津浪のように遠ざかり

大阪市 橋高薫風子

天才の根気の無さがあわれなり

女房と言うは糸屑さえ捨てず

明け方の火事を病人知っていた

下関市 中村九呂平

しくじりがあって机に狭く居る

何糞と故郷を出たが運のつき

かくそうとすれば影までピッコ引き

大阪市 池戸桃村

朝寝から昼寝までして老婆の

ぬれ衣をだまって笑っとくも老い

大阪市 西川晃

闇米を運ぶ背後の積乱雲

釜ヶ崎風景

臓物の焼ける臭いで街が染み

鳥取県 田中蛙眠子

警官を下駄で蹴って男売り

主任技師という名で地下足袋履き馴れる

朝顔が子供日記の中で咲き

岡山市 林葵丘

薬にも流行のあるおそろしさ

商品券汚職の臭いかくして来

肩車の子が銭湯ののれん分け

神戸市 仲どんたく

専務ともあろうにけつねうどん喰い

アロハシャツ蜂一匹へ悲鳴あげ

六甲山の家にて

百万弗の夜景を霧が見せ惜しみ

平田市 久家代仕男

パチンコの腕が自慢の議員章



一生をシャボンの泡の如く消え

大阪市 本多省三

誓詞いんぎん出雲の神もおかしかる

子にも欲し親にも欲しい修身科

ゼイ竹が不倫の恋へ味方せず

パーカーで手形サラサラと書け

大阪市 大谷月都

知り合いと言う程値段負けていず

相談役に入れたがすぐに辞められる

岡山市 江国幽谷

言い訳を考えてたら雨になり

儲かると言う記事みんな読んでいた

岡山市 光好陽子

サツク服肚とは別にほめておき

キャンプへ来てまでロカビリー騒ぎたて

西宮市 河相すゝむ

学校を終えて娘の嵩たかし

西宮市 野呂鶴汀

堅実に歩んだ上の路地住い

御堂筋音におびえぬ雀が居

西宮市 樋口舟遊

借りて来た秤も狂っているという

三流をならべ夜店の灯がともり

新潟県 高野むじな

病気にも先輩がいる有難さ

結婚の許可も貰うて退院し

警察の方は暴力とは言わず

高槻市 辻白溪子

逆転ヘテレビの人も手をたたき

附添いは週刊雑誌を読んで待ち

店員のお世辞も年期の差がひらき

高砂市 吉原紅月

弱点に触れず後妻に来てもらい

塩辛い汗下積みと言う意識

大阪市 欄蘭

西瓜の皮捨場に困る二階借

花火

他所見している間に花火一つ上がり

大阪市 石倉旅風

冷房のデパート通り抜けるだけ

盆踊り日本人の顔になり

大阪市 魚住満潮

近所火事そうかと寝てる年になり

老夫婦一人が缺けた傷ましき

死と言うことがかくも美しい年頃

堺市 田中狂二

義務ないとは悴はつきり言つてのけ

仲裁を買って出て来たアロハシャツ

大阪府 林昌男

肩書をとれば魅力のない男

岸和田市 津田千舟

心入れ替えて入墨消す手術

配給の米もくずして買う世帯

高野総本山着流し拜観不許可

弘法もサツクドレスへ目をつむり

愛媛県 村上旭童

ノミ一匹がとれずに夜がふけかかり

死に様もあるに農薬など飲んで

倉敷市 大前鳴枕

満員車座席はアイスクリームなめ

無警手の踏切恋の手をつなぎ

鳥取市 北村三歩

大ジョッキ位に飽忘れかけ

長男出生

産声の大きさ電話に言い添える

神戸市 傍島静馬

漫画読む子供散髪ゆずり合い

脚組んで女煙草をやおらつけ

大津市 杉原吟女

日盛りをサツクドレスすすめに来

恋人がでたのか電話ひくうなり

四つ辻で病気の話まだ切れず

出雲市 原独仙

おばあさんもひばりが降りるのへ揉まれ

酔えば又デカンショだけの課長にて

笠岡市 木山遠二

読む時間なし保険屋の説明書

ほんもので買って売る時賃になり



かいしよもん

— 文士は眞の大胆豪放なる
大阪商人のド根性を識らない

堀口塊人

本誌八月号の「大阪の民俗を語る」はなかなか面白かった。阪神の地に約四十年生活している私にもいろいろおしえられるところがあった。そこで、こんなもん、を書いてみることにした。

大阪ブームは江戸時代にもあったらしい、それは「くだらぬもの」という言葉にのこって居る。新興都市江戸へは、京阪の地から商品が流れ、一種の国内貿易が行われた。そこで、東下りをして来た商品は、「くだりもの」であり上等舶来を意味する言葉となって居た。これに反し、「くだらぬもの」はつまらない粗悪品であった。(この項宮本氏著「大阪」に依る。)大阪の作家、井原西鶴が江戸に滞留したのはその頃かもしれない。(貞享三年—元祿三年)

貿易商社の人間は今でも外人の事を、お互同士で「毛唐」と呼ぶ事がある。相当期間、海外に居た人でも「毛唐」を口にする。これは、どうやら、日本人の劣等感が変型したものらしい。いささかきげすみのある語感によって、自己の劣等感をなくさめて居るわけである。江戸の人々が好んで

口にした「ぜい六」も亦これに似ている。

食満南北翁は、ぜいたくを六つするから、「ぜい六」だと言われたが、江戸ッ子が使用する場合には、その反対に、けちんぼ、を意味する用語となつて居るようである。宵越しの銭をもたない江戸ッ子の気前がよくて、がしんたれの上方ぜい六が、けちんぼ、かどうか、上方だけにしか生活した経験がない私にこの比較論は出来ない。しかし、大阪の船場の苛酷なる食生活についてはいささか奉公人としての体験をもつて居る。それと同時に、その苛酷なる食生活を奉公人に強制して居る船場の問屋が、ひとたび商売の話となれば、南地に北陽にどんなぜいたくでもするのみならず、大胆に投資し、豪放に取引をする事も知っている。

少くとも商売については、家康の保守性が江戸を代表し、秀吉の進取性が上方を代表しているように思う。明治維新の時に、経済的基礎のあやふやな明治政府に投資したのは、京都大阪のけちんぼ商人であった事も想起せられるべきである。

都の、しまつ屋、と言ひ、京都の人が大阪より以上である事になつて居る。「芸術新潮」創刊の頃、谷崎潤一郎の小説のモデルとされた京都のさる女性が問題をおこし、小説は中止されたけれども、この中止の真因は、モデルよりも、京都人の生活様式の書かれた点が、より以上問題になつたのではないかと想像される。鯛の折詰を何日もおかずにしたり、水道の水を絹糸の如くたらしめてメートルの上昇を防いだり、マッチの軸を縦に二つにわつて二本にして使用したりする事は私にも経験があるだけに微苦笑を禁じ得ない。しかし、これだけが京都人の生活である、とするのは当たらない。そのしまつやさんが、都踊に、祇園祭に、顔見世に、熱狂し浪費する半面のある事を知らなければ公平でない。私は去年の夏、四条に近い河原町の一角で、祇園祭の馬に乗った稚児行列の衣裳を見ておどろいた。絹であるか紗であるか知らないが、全部絹物の装束である。これが、瓦斯の螢火で茶を湧かす人人の祭なのである。揃いの浴衣で樽神輿をかつぐようなくさい祭では

ない。西鶴は「世間胸算用」の巻三の「都の顔見せ芝居」のはじめに斯う書いて居る。「今日の三番三、所繁昌と舞おさめ、天下の町人なれば、京の人心、何ぞといふ時は、大気なる事、是まことなり。これ常に胸算用して、随分、始末のよき故ぞかし。」何ぞという時は、大気なのが京都人の性格である。

最近の「オール説物」に長谷川幸延が、「東西南北」を発表した。食満南北翁をモデルとした逸話小説であるが、洒落物とみられた南北の案外なる真面目さが強調されているだけであつて、その、寛濶なる遊びの精神、が現れていない。現在、上方物の第一人者たる幸延にして然り、その他、大阪物、を書く多くの作者に欠けて居るものは、大胆豪放なる大阪の商売人根性に対する認識である。泉鏡花に「南地心中」があつてもこれは夢想的な物語にすぎず、水上瀧太郎の「大阪の宿」は、むしろエトランゼの見た大阪であり、近く「三等重役」の源氏鶏太にしても、惜しいかな、ある不動産会社の部長さんとして体験が基礎になつてゐるので、大阪の商魂に触れるようなところがない。むしろ北条誠の「王将」の坂田三吉には如何にも大阪らしい、ド根性が、出ているが、これとても大阪商人のそれではない。

文士は商人を識らない。夏目漱石の小説に出て来る、実業家、は下等下品にして度すべからざる人物である。最近評判になつた「大番」にしても、よくぞあれだけ株式商売のテクニクを書いたものとびっくり

させられるが、それにしても、専門の証券屋さんから見れば甘いもの、ナンピンや逆張りや親不孝相場程度なら北浜の小僧さんでも口にするところである。世の中に知られて居る商人や事業家には、その道からみれば案外、小物が多い。これは、どうしても広告宣伝しなければならぬ商売の方が、よく知られているからである。たとえば、東洋紡績よりグリコの方が子供によく知られ、富士製鉄より福助足袋の方が女に知られているようなものである。その実、今大関と称せられた小林一三さんにしても、大阪商人としてみれば、電車や劇團や芝居で、日銭をかせぐ事をやってのけた国内事業にすぎず、七つの海を又にかける貿易業から見れば、ちんこいものである。百貨店の売上げが月拾億圓を越すと、売上増大を云々するが、取扱高月拾億圓程度の貿易会社ならそこらにころがっている。

年額約一兆圓の日本の輸出額のうち六十パーセント以上を十六商社で取扱っているが、そのうち東京係は二三社にすぎず、そのほとんどが本拠を大阪に置いて居る。しかも輸入品の主位は棉花であり、輸出品の主位は綿製品を中心とする繊維製品である以上、貿易を知り綿業を認識しなければ大阪を代表する商売はわからない。なるほど昆布屋さんの、のれん、も大切であり、その商魂のたくましさは敬服すべきものであるが、これが大阪を代表する商売のように思われては、何だかおどろきおどろき儲かれば進み儲かなければ休む、これが商人である。これは王手詰以外に将棋の

ルールがないのに似て居る。今やかましくなっている中共貿易にしてもこの原則以外に何ものもない。金は香港で決済して、品物は青島から積出すような貿易は、国会のお歴々が旅費先方持で第一次貿易協定とやら云うものをお結びになる前からはじまっている。岸さんが横むこうが周さんが拗ねようが、協定があるうがなかるうが、儲ければやり儲からなければやめる。香港からシンガポールから、何なら大狼の閨柄の台湾からでも、やってやれない中共貿易ではない。こんな狭い日本国内でも非法法のかつぎ屋さんが横行しているではないか。協定を結ばなければ日本が破産するように叫ぶのは、政治家屋さんの誇大妄想である。

貿易の先覚者の一人に白洲平太と云う人があった。和歌山紡績へ印度棉の先物を売契約したが、若槻内閣から大養内閣への政変により、相場が暴騰し、本国からの買付に失敗して、受渡し不能となった。ある一日南海の雄南楠太郎を和歌山紡の社長室に訪れ

「南さん、相場に負けたんや、これで勘忍してくれ。」と、新聞包を差出した。

「負けたんならしよないな、これでかんにんしとこ」と包みを受取り封も切らずに机の抽斗へしまいこんだ。側近の一人が

「社長、中を改めてみられたらどうですか」とすすめてみたが、

「開けてみたとしてそれ以上のものが取れるか、相手は頭を下げてきたんやないか」とそれっきりであった。その当時の金で万を越す額であり、その包みは、地所の譲渡書

類であった。

江南株式会社の戦前の重役に西村磯右衛門と言う豪傑があった。はじめてのアメリカ視察旅行をした、ある年の夏のこと、ダラスから紐育の汽車の中で、彼氏おもむろにネクタイをほどきワイシャツを脱ぎだした。この無作法なる東洋の紳士におどろいた車掌はとんで来て注意を促した。英語のわからない彼氏は

「おまはんこの人何言うてはんのや」と附添のダラス支店長に問い、それからダラス支店長通訳のもとに、車掌との問答が交されたのであるが、以下その手数を省略して直接の会話として写生してみると

「婦人モ同乗ノ車中デ左様ナ無作法ハイケマセン。」
「私ハ甚ダ暑イノデアル、暑イカラ脱ギタインノデアル、ソレヲ禁止サレテハコマルノデアル。」
「ソレハ交通機関ノ規則デアルカラ致シ方ガナイ。」

「左様シカラバ私ハ如何ニスレバ、ハダカニナツテ、アメリカデノ自由ヲ享スル事ガ出来ルノデアルカ」
「一車輛ヲ占有サレタナラバ可能デアル」
「大イニヨロシイ、次ノ駅カラ貸切一車ノ増結ヲ要求スル」

「イエス、御希望ニ従ウデアロウ」ざっとこんな有様である。斯くして、わが西村磯右衛門氏は同行のダラス支店長とたった二人の車中で裸になりアメリカ大陸を横断したのであった。以上二つは、国際的大阪商人の豪胆なる半面である。

近頃、海外での日本人、特に国會議員諸氏の行動が問題になっている。言葉のわからぬ知らぬ他国で、多少恥をかくのは当然であって、スリッパを音たててすつたり、ホテルの廊下をシャツ一枚で歩いたりすること、まるで国辱か何かのように大げさに云々するにも及ぶまい。日本の畳の上へ靴のまま上る観光客はさらにいるではないか。それより問題とすべきは国家使節が海外で宝石商をひやかす行動である。安もんを買えば笑われ、高もんを買えば外国為替管理違反になる。だから単なる旅行者が宝石商へ立寄るのは問題ではないが、国家使節としては自重するのが当然である。ところが、この程度の常識すらない、使節や外交官がいるのであるから困ったものである。

(かつて岸首相のマニラでの宝石ゴシップがあった)少しは前記、西村磯右衛門の爪の垢でものもんでみるべきである。
文壇や芸能社会で「大阪物はますますはやる事と思われ。ところが、大阪と言う古くて新しく巨大なる都市は、知識人や文化人風情のびんちよな頭では理解されるものではない。今日の東京は全く外国化されて居るようであるが、それは外国の消費文化の物真似であって、生産と貿易による取引によって、国際都市となったものではないのである。大阪を理解する為には、国際的視野をもたなければならない。それから、かいしよんとしての国際的大阪商人を知らなければならない。がしんたれどがいしよなしの頭では、どないしてもわかりまへん、のが大阪である。



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔五六九〕

牧水でなくとも泌みる秋の
酒 (多久志)

歌人、若山牧水に「白玉の
齒にしみとほる秋の夜の酒は
しづかに飲むべかりけり」と
いう酒を詠った名高い歌があ
る。この歌を巧みに引用して
この句が生まれたのである。

「牧水でなくとも泌みる」と
云って秋の飲酒をたたえたこ
ろにしみじみとしたものを
感じさせる。

〔五七〇〕

イヤリングいやよいやよと
揺れている (豆 秋)

「いやよいやよと揺れてい
る」は一読しただけでは極く
平易な表現に見えるが、所謂

無技巧の技巧の句で人物が躍
動している。殊に「いやよい
やよと」いう中七の重語法に

情緒を横溢させている点、凡
手でないことが知れよう。

〔五七一〕

敷きのしの重しとなつただ
けで暮れ (香 林)

市井の凡人の平凡な生活
を詠んだ句には違いないが、

そこには生活への反省があっ
て軽々には見過ごせない句
である。いつきに読み下だし
て、何んとなしきしみじみとし

たものを感じさせるではない
か。啄木の歌の淋びしさとい

う言葉が云えるとしたらこの
句にはそれに通じる淋びしさ
が漂うていると云えるだろ

〔五七二〕

ハイお土産裕ちやんのプロ
マイド (芳 仙)

この句の面白さは「ハイお
土産」という上六字のへうき
んさにある。あたり前なら、
ハイお土産と、「と」の字を
押して声調を整える筈だがワ

ザと「と」の字を入れずに、
「と」の代りに休止符的なマ
をそれに替えて、句をいきい
きとさせている。裕ちゃんは

云うまでもなく人気俳優の石
原裕次郎の愛称である。

〔五七三〕

見くびつていた職業につい
ていた (千 里)

この句から、どんな職業で
あるかを引っぱり出すことは
出来ないが、それだけに、あ
んな職業なんてと見くびつて

いたどんな職業にも通じる訳
である。この句には自己嫌忌
と云ったものが感じられる

が、それでいて、どんなにし
ても生きねばならないとい
うことを知ったのである。

〔五七四〕

米 国 川 柳 通 信

築山快夢起



ケーブルカー

桑港はロスアンゼルスに比べて
バスの便利も良く、ホノルルと同
様な新式バスが市内を縦横に走っ
ていますが、之れに交って前世紀
の遺物然としたケーブルカーが奇
怪な音を立てて坂道の急傾斜を上
下往復して客を運んでおります。

パウエル街とマーケット街のT
字形に落ち合う所がケーブルカーの
下町終点で、カーが此処まで来て
客を降ろし終ると、其処に備えて

あるTURN・TABLEと呼ぶ
回転盤の上に乗せられ之を車掌運
転手がエツサエツサでカーを方向
転換させるのですが(それ程小型
で楽に動かします)時にはその辺

の弥次馬までが加勢して之を押し
ている処は周囲のモダンな建物に

対照して誠に時代錯誤な光景で漫
画家の好材料になります。
余りにも時代遅れなこのケーブ
ルカーを取除けると言う議題は幾
度か市会の議事に上ったのだそ
うですが結局は市の名物として保存
と定まり、今日なお滑稽な姿で下
町の一番忙しい処で交通機関の一
役を買っている所がいかに桑港
らしい風物詩であります。

鳩

私達が桑港に居る間にパウエル
街終点近くのホテルに泊っていま
したが、此処の周囲はマーケット
街に近く市内でも一番ゴツタ返す
場所ですが、此処にいつも五、六
十羽の鳩が群遊んでおり、またこ
の鳩の群にわざわざボブコンや豆
を買って来て呉れてやる老人も一
人や二人ではないので、鳩の方も
往來の群集に馴れ切って餌を食べ
ている風景は土一升金一升の盛り
場には珍しい眺めとしてハッキリ
印象されています。

ラシアワー鳩も忙しく餌
をあさり

野外演説会

之はロスでの話、ロスアンゼ
ルスの海岸は、市の中心から大分遠
いのですが、サンデーやホリデー
の群集は物凄い程です、ロングビ
ーチ・パークで面白いと思つたの
は此処では各所から集まつている
老人達の為にチエツカーやゲー

キスしてほしい用件だと見
抜き (むじな)

別にこれという用もないの
に会いに来る。

「何か用？」

と云っても、

「別に」

と云ったまま、帰えろうとも
しない。

そうだキスして欲しいのだ
など見抜いたが、そこまで発
展させるにはまだ時間がある
と云った句である。

「用件」と云う用語にユーモ
ラスな感じが出ていてはおえ
ましい。

〔五七五〕

洗濯機粗品と書いて運ばれ
る (鬼美)

洗濯機へ粗品と書いて運ん
だと云うだけでは味も素ッ気
もない句のようであるがわい
ろに贈る粗品だと判ると平凡
な句とは云えない。粗品と書
くにはあまりにも嵩張った
品であり、あまりにも嵩張っ
た品であるところにユーモア
を感じる。贈られる人がサラ
リーマンであり、思いがけな

く洗濯機が据えられて、よろ
こぶ人が、その人の妻君で
あることが想像にかたくな
い。

〔五七六〕

鉢巻をすれば先生もおつさ
んや (蛙眼子)

先生と云えば一般に曾ては
尊敬されていた。しかし民主
主義時代、自由主義時代にな
って、先生は労働者になり下
がった。それでも、まだ筋肉
労働者との間に一線を劃して
多少の尊敬を保持していた。
ところが勤評問題から多数の
先生が一般の労働者と同じよ
うに鉢巻をしてデモルように
なつてから先生に対する尊敬
の念が全くあとを断ちそうで
ある。先生も鉢巻をしたら、
ただのおっさんだとは皮肉な
観方である。

〔五七七〕

少年のやくざ口調にどきり
とし (牧人)

すべての少年が、そう云う
訳ではないが、近ごろの少年
の中には、やくざ口調の者が
かなりいるようだ。作者はそ
れに胸を衝かれたのである。
こんな風潮を産んだ直接の原
因は映画の影響であることは
云うまでもないが、少年の前
途に希望が持てず、刹那主義
や悪い意味の自由主義を育て
て来た政治の罪だと云えるで
あろう。

〔五七八〕

一生をオイコラハイで終り
たる (夜潮)

女の一生をこんなに簡単に
諷した句を知らない。女の無
自覚、女性の悲劇がいつまで
続くことか、測り知られぬも
のがある。

〔五七九〕

我れは山の子大阪からリュ
ック (永断)

大阪駅から各地の山を目指
してサツソウと発って行くリ
ュックの姿は青少年の羨望の
的に違いない。「我れは山の
子」と云い切れる山の魅力は
大したものである。

が用意されている外に野外演説会
場の設備がしてあります。

其処には数十人が坐れるベンチ
とスピーカー・テーブルが設けら
れ、我と思わん者はこの演壇に立
って政治、社会、経済問題、何でも
ござれ意見を吐く事が出来ます。

討論、立会い、いろいろな形式で
自分の考えを吐くので中々の人
気、丁度加州の予選前であったの
で政治論が大部分はすみ、民主黨知
事の候補バットブラウンが絶対的
優勢であった様です。ホノルルでも
アラ公園のルンペン諸氏や隠退
組も此処まで進んで来ると余程面
白いと思いますが如何です。

禿頭がスチームあげて政
治論

或日新聞で拾った如何にも加州
らしい特ダネを知らせましょう、
ロスの田舎に犬や猫その他のベッ
トを商う者がいました。彼は例
のスカンクを臭気止がしてあるか
ら絶対に臭くないと言う保証付
で、一疋二十
弗で市内の三
軒の小売店へ
売り付けまし
た。

ところが買
った当座はど
うもなかつた
が四、五日経
つと次第に匂
い始め、つい
には臭気ふん

スカンク訴訟事件

ふん、どうにも持てなくなつたの
で、この小売屋さん達は売主を相
手取って代金回収の訴訟を起し、
その中の一軒では臭気止めを
め更に二十五弗を費したと言うの
で合計四十五弗を要求したそう
ですが、この珍裁判がどうケリが
ついたか聞き洩らしました。

鼻持ちのならぬ訴訟は持
越され

私のロス滞在も大分長くなりま
したが、五月末からかねて念願し
ていた西海岸をバスで北上しパン
クーパーまでの旅行を続けて帰り
目下英気を養っている所です、布
哇から見える人々は殆んどが見物
に出かけるのはメキシコ境か、ラ
スベガスですが之からの熱暑を冒
してまで行く価値があるかどうか
か、余り乗気がしません。

スモートで 着心地のよい

O.S.K.
レディース

大坂商店
大阪市東区東船場一丁目二番地
電話(94) 1745、1746



「ま」と云う、こと

—— 絵画なら白く残した部分

戸田 古方

「風と波と」というラジオドラマの題を紹介するのに「風と」と「波と」の間に一寸「ま」をおいていたので、それが何ともいえない美しいものに聞えました。

映画「二十四の瞳」で有名になった壺井栄作の連続ホームドラマなんですが、劇の中味よりも、この「風と波と」のいい方にひかれて、毎日十一時になるときまでラジオのスイッチを入れたものでした。

ラジオは耳から直接に入るものですから、この一寸の「ま」をあらわすのに至極簡単で、自然ですが、これを文字にしますと、「風と、波と」と句読点を入れるか、戯曲の中でよく使われている（間）というカッコ入の漢字をはさむぐらいしか手がないことになります。

この場合は句読点ぐらいでいいのかもしれないんですが、はたして読む方で註文通りの「ま」をあけ

てくれるかどうか、また、

「風と 波と」

と間に一字分ほどあけてみるのも一つの方法でしょう。

風と

波と

と行わけにしてもいいと思われませんが、間延びの心配がないともいわれません。

路郎句集「旅人」にはこの行わけがとり入れられていましてなあちろり

これから秋に親しもう

という風に「旅人」には一頁に一句か二句、しかもこうした行わけが殆んどの句に行われています。創作の意図を充分鑑賞するのに最も適した方法と考えられます。もしこれを

なあちろりこれから秋に

親しもう

と一行書にしたものとくらべてみますと、この「ま」のことが自然のみこめるのではないのでしょうか。

「ま」ということにも小さきま

まの場合が考えられるのでありま

して、戯曲の場合、「幕」、「場」、

それから一場面の中で人物の出入

のあいだにおける「舞台空虚」な

ど、みな「ま」なのです。一冊の

書物にある「部」、「篇」、「章」、

「節」、「項」などもそういえば

「ま」なのでしょう。

「ま」は文学だけの問題ではあり

ません。「ま」というのは本来空

間の「間」で「居間」とか、「次

の間」「奥の間」等から出ている

のでしうが、「ま」というとき

はむしろ時間芸術の場合にはつき

りしています。ことに和楽では大

切なもので、一番わかりやすいの

はやはり時間芸術の「ま」でし

う。が、本来の「ま」がそうあ

た如く、空間芸術の「ま」も無視

することは出来ないと思います。

日本画の描かずに白く残した部

分、これが適当にいかなければ見

これも「ま」といえますしう、黒の濃淡や筆つぎの場所も又「ま」です、竜安寺の石庭の白砂も同じ意味をもつものでしょう。

一体、日本の芸術ではこの「ま」が非常にやかましく、また大変むつかしいものになっています。

それはただ単なる呼吸つぎとか、休憩という以外に、演技又は創作する側には主観的解釈の余地を、そして鑑賞する側にはめいめに豊かな想像の余地を残しているものであります。

一般にヨーロッパの芸術における「ま」は我国の「ま」にくらべますと、科学的というか、作者の意図を正確に守って「ま」の再現や解釈にも努力がはらわれています。楽符や絵画における構図法、色彩理論がそれです。数学の方程式に出てくる等号や機械のリズムも「ま」といえば「ま」なのでしう。リズムは規則的にくりかえされた「ま」です。

しかし、科学の世界は別としても、芸術においてはヨーロッパでも名人、名手といわれる人は自分自身の独自の解釈としているのであります。そのため「ま」はいかに細かく楽符や構図法が教えたとしても、それをたくみに破っているのであります。

東洋における「ま」は「まのび」、「まぬけ」、「まがあらう」とかいわれるように、人生哲学的な

意味をもっているのであります。無と有の問題につながり、「ま」を無だけとは考えず、有を「ま」のはいりこむ余地のないものとして理解することが出来るのです。そして考えられる絶対的「無」と絶対的「有」の間に、無限りのない相対が考えられるのであります。

なあちろり

これから秋に親しもう

において、第一行目の「なあちろり」は一応区分しがたいものとして、一行にかきおろしていられるのですが、「なあ」と「ちろり」はわければわけられるものでありますしう。そして「なあ」はこれ以上わけられぬもの、「ちろり」も又これ以上わけられないものであります。いつてみれば無の空間である否定の「ま」を否定しているの、いわゆる否定の否定であります。ヨーロッパ人は数学にいう「一」と「二」が「十」になつてるといたって冷静な説明をしますし、我々は「善人なおもて往生す、いわんや悪人をや」と血の通った形でうけとり、そこから東洋の、いや日本人の詩が生れるのです。

「ま」は科学や自然現象の中にもみられるものであって、宇宙の真理の一面を含むもので、人間はその中に包まれながら生きています。ここでは芸術に限

ってもう少し掘り下げてみたいと思います。

さて、芸術ですが、芸術といわれるものは空間芸術、すなわち眼を通しての芸術、造形美術と、耳を通して時間芸術、すなわち音楽を純粹なものとして、それがいくつかに組合されて、舞踊、演劇、文学、映画となってあらわれているのでありますが、そのいずれを鑑賞するにしても、多少とも特別の機会をつくる必要がありました。展覧会とか音楽会とか、公の集会所へ出向いたり、又は書物、レコードの助けをかりなければならぬでしょう。書物やレコードはいたって手軽ではありますが、マス・コミュニケーションでは遠くラジオやテレビには及びません。

ラジオやテレビは現代をこまごまこしらえていった、そしてこれからもどんなにこしらえられて行くのでしょうか。誰でも、いつでも、スイッチ一つで芸術鑑賞の場へいや応なしに引ずりこんでゆくマシンです。

芸術に於ける自由性という点からいえば、これくらい自由であって、又同時に不自由なものはないのであります。茶の間にいながら楽しめる自由とプログラムにしばられねばならぬ不自由さが先ず考えられます。

ラジオ、テレビの「ま」の問題

も、その自由と不自由に関して、いろいろと現われて来ているのであります。

テレビ禍ということがよくいわれています。数年前までは海の向うのアメリカのこたたとばかり思っていたのに、テレビ台数百万を突発したとかいわれる今日の日本では切実な問題となって来ているのです。子供がテレビの前にばかり坐って勉強しない、これは正に事実であります。子供だけの問題ではありません。ラジオならば耳だけで、仕事をしながら、仕事の種類によっては聞くことも出来ました。自転車乗りやオートバイ乗りが、イヤホーンをつけているのを見かけもしましたが、目と耳を同時にふりむけねばならぬテレビとなると、そんなことはとても出来ない相談です。すっかり捨てて坐っていないければなりません。プログラムのある間、朝から晩までという恐ろしいことも起りかねないのです。プログラムの狙いうちということも出来ませんが、内容まで知らされているわけではありませんから、全くテレビの間をぬって仕事をしたり、食事をしたり、風呂に入ったり、と正にテレビ禍といふべきです。これもまぎれもない「ま」の問題であります。

番組と番組の間も「ま」といえます。公共放送のNHKなら

適当に風景の挿入や、それにマッチする静かな音楽で心もからだも休まるのですが、商業放送の方はここが書き入れと、これでもか、これでもかと広告責めです。ラジオの時はそれ程にも思わなかった広告放送も、眼と耳からやられるんでは全くお手あげです。しかも時と場合もなく放送の間にもスーパ・インボースです、広告の文字が流れます。所謂「ま」もテレビまで来ますと、マンモスの意思に一センチもさかれない所まで追いこまれてしまっているのです。

しかも、テレビにも教育的要素はあるというものの、無線電話と無線電送は全て受話であり、受像があるだけです。このことから質問はおるか、繰返し見せてもらうわけにはゆかないのです。

とはいいながら、今日も休暇の最終日、原稿をかくのもどかし、テレビの前に坐りつづけることでしよう。

さて、ここまで書いてくると、大衆の詩である川柳とテレビとが結びつけられそうな気がするのですが、

ラジオと川柳は先人によって、ほぼつづつ利用されはじめていますが、テレビの方は時たま時事漫画のツマの程度に、しかも磨のかからない川柳がちよっぴり顔を出した位です。俳句は割にあるのですが、テレビ歳事記とか句碑巡礼

などのを見ましても、その扱い方はすこぶる幼稚で、向上とか、鑑賞とかの役立つところまでできていないようです。しかし、耳で聞くだけでなく、眼でも文字が見られますので多少印象的だといえます。

川柳や俳句は短冊や色紙にかいて発表するという手もあるのですから、題をあたえられ、想をねり、句にまとめ上げ、揮毫するといった、作句現象を分析して見せることもテレビならばこそ出来ることのようにも考えられます。

すでに出来上った句の場合には柳画、俳画にあたるものかわりに写真の幾カットかをたくみにつかって分析したり解釈したりすることも出来るでしょう、そしてその中に川柳の「ま」の説明も出来るように思います。

川柳は一句が寸劇を産むことも可能でありまして、小畑自由朗さんあたり脚本をかいてもらい、それに句をのせる、あるいは句にそれをのせることも出来そうです。

川柳を映画で普及しようという考えは本誌でも取上げられた題目でしたが、映画よりもテレビの方がせやすいのでないかと思われるのであります。

しかし、細かくすればするほど動きのとれないものになりますので、慎重を期せねばならぬことは勿論ですが、うまくやれば短詩なればこそ生命といふべき、この

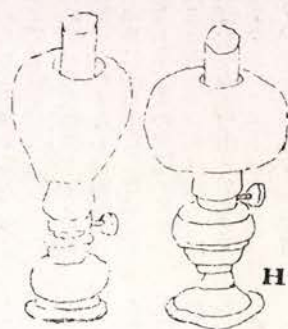
「ま」の問題も正しい鑑賞へ、又深い鑑賞への道がひらけて行くのではないとも思われます。

川柳は十七音字の短詩であり、作句者のいきの長短で多少の破調もありますが、基本は五音、七音、五音、そして同じ十七音字でも、五、七、五の外に、七、五、五とか、十二、五、とか、八、九とか、五、二十とか、破調で、七、三、八とか、六、四、八、とか、六、七、五、とかにわけられているのであります。

ちよほちよほちよほちよほちよほとくく女郎花 霞乃

これは六、七、五、の一例ですが、「ま」の問題を研究する好材料の一つとして研究を試みられてはとおすすめします。他の句例は路郎先生著「新川柳講座(昭三三年版)」又は同著「川柳とは何か(昭三〇至文堂版)」に詳説されてありますから御覧願うとして、作家の息によっていろいろの区切り方があり、区切り方こそは「ま」の研究を具体的に方向づけ、第一歩を型造っているものといえるのであります。

要するに「ま」は力と力のつぎ目のです。そして創作者と、ともに鑑賞者に休らいと前進をあたえ、文学の絶対境へみちびくものなのであります。したがって、十分研究に価する問題だといえるのであります。



須崎豆秋論 (3)

— 或は詩川柳に於けるデイオニソス —

高 鷲 亞 鈍

デイオニソスの詩人性

前章の「豆秋録音」によって私達は豆秋の川柳作家以前の豆秋を知ることが出来たのは、醜ろげながらも豆秋とその作品の理解を深める上に大いに役立った。彼の青年時代は養家先から首になったほど無軌道であり、反面芸妓遊びが出来たほど経済的には恵まれていたことが一つ。短歌雑誌を出してはいたほど文学青年でもあった。のが二つに挙げられる。私はそのころの憶出しきものを作品から拾ってみよう

- A 中学の桐の花こそなつかしや
- B 初恋をして学校があほらしく
- C 文学にかぶれて死んだことにされ
- D 食うものも食はず少尉に育てたが
- E 三十でつるりと禿げてきた悲劇
- F ふるさとが近し眼鏡の玉を拭く
- G ふるさとの螢が夢の中をとび
- H ふるさとの螢をおもふ目を閉ちて
- I 桐葉葉ハヤ／＼百田札に見え

以上は作句の年次順に並べたのではなく、凡そ、豆秋の若いふるさにいた二十代の青春の憶出を、四十に近くなって川柳を始めた頃から折りに触れて書きとめたものであるとみる。それだけに作品にムラがある

が、その作句態度は丹路ばりのロマンチズムに一貫しているのは意外である。恐らくふるさとを離れ、大阪に住み、現代を作句した彼独特の養リアリズムによる諷刺が、ここにはその片鱗さえ見出せないのは何故だろうか。(E)の句は本来なら憶出の句にはならないし、所謂豆秋句風であるが、自己を語る句として一応入れている。凡そ、ふるさととは遠くにおいて思うもの、と詩人室生犀星が純情詩集で詠った如く、豆秋も亦ふるさととその青春時代を郷愁することによって、彼の純粹詩性が蘇返ってきたのだ。

私生活に触れざるを得ないが、豆秋の生家は貧しく食うや食わずで中学を出された。ところで養家先では富有なので少し位は遊んだが、——そういった遊びが原因でなく豆秋自身が性格的に養子の不向きから、自ら飛び出した。と私は解釈する。彼が口にした短歌時代の作品「このころ一つ違えば氣狂いにならんとする如月のきつ」はその頃の唯美派全盛の短歌界には異端的なニイチエイズムである。斯のようなトラストが豆秋の青春の血に忍んでいたことは、彼が、先天的な詩人であり、外延的な方面よりも、求心的な性格であったと判断した場合、これらの豆秋という作家論を語る重要な鍵である。私は信じたい。豆秋は母校の桐や直紅な曼珠沙華をなつかしみ、飛び交う螢を夢にみ、ふるさと思ふときは儚ない初恋を憶う。ちようどメルヘンに生きる王子とお姫さんのように。しかし現実には、彼は三十にしてつるりと頭の禿げた自己を凝つめ、スコップのような桐の葉が、金に苦しむ豆秋には百田札に見えたのだ。

彼のしかし、ふるさとで送った青春時代は彼に襲いか、ってくる生活の重圧は何もなく、比較的温存されていたある意味で坊っちゃんであったかも知れない。しかし彼の詩人的な宿命は、その周囲の平穩故に抵抗する激しい気性に転化しつつあった。

あの善良にして温厚な飄々とした今の豆秋を知るものに、以上のような考察は妥当でない、読者は言うかも知れない。しかし六十が既に半を過ぎ、なお路郎師と同じような青春の血を多分にもって、酔えば大声をあげて、青年将校にかえって号令叱咤し、非常識な無茶苦茶を演じて路郎師の破門に成りかねた(註・1)という反面のあることを私は知っている。ある柳友は、それを二重人格とも精神分裂性とも言った。私はしかし豆秋のジーキル氏とハイドは人間の誰にでも大かた少なかれ持っているものと考えたに別に驚きはしない。私はそれら二つの性格を持つ豆秋の表面を粧う善意の人としてよりも、彼の背信を免くことが、彼の川柳を評するにより適切であると考えた。

(註・1) 昭和三十年頃、豆秋氏と親友であり、共に川・難不朽洞会員の常任理事として重くみられていた木谷鮎美氏と共同声明を出して不朽洞会を脱退した事件があった。これは二人の一方的な脱退声明で、本文では破門になりかねぬ。と私は筆の勢いで書いたが、本当は鮎美、豆秋から、恩師に砂をひつかけて勝手に飛出し、全く理由も何もないのだ。はつ路郎師は狂人のやつていることだ。はつとくだけさ。と流石に弟子を知る明、的確なもののだが、当時の不朽洞理事長中島青々庵氏他幹部数名が脱退を引留めようと再三、留意を促したにもかかわらず、いに柳境外部にまで脱退公開したため、路郎師よりも、同門の柳友達の忿懣をかう

ような結果にまでなった。

狂人の瞳

以上前節に於て、豆萩なる具体的實在の人間を捉えて、詩人の先天性を抽象した。

凡そ詩人の先天性にはアポロ的とディオニソス的と二種類に分けられ、前者は芸術の詩神であれば、後者は生活する人間の為の芸術である。そして前者は純粹絶對的な世界観が想定され、後者は混頓濁濁のオオスがその世界観にある。凡そ一般の川柳界に於て詩性を云々しているが、私の知っている範囲では、アポロ的詩性を川柳に取入れていることが詩性川柳と解しているのではないだろうか。しかし抒情詩必ずしも詩ではない。(叙事詩もあるからだ。)青春の純情は清らかであり、その恋愛も亦純粹であれば、若い頃の人間は誰でもアポロ的詩人であるかも知れない。しかし大人になつてなお抒情詩人であり、プラトニック・ラブは可笑しい。それらアポロ的純粹精神は、現代詩の場合には主知的な数学的計算によるボール・バレリーか、又は純粹な祈りを神々に捧げる牧師、アンリ・ブレモンの純粹詩にまで到達されねばならない。(註・1)

斯る時、川柳が遅まきながら、その昔詩人達によつて論じられた少年感情によるアポロ的詩性を川柳に移入すること事態がグロテスクなのである。恰も初老に近い長谷川一夫が映画の忠臣蔵で蔵之助(川柳性)と十代の若衆姿の大石主税(抒情性)に役柄をとりかえるようにそれは自然ではない。(註・2)

さて豆萩の思考するディオニソス的觀念は前節の註で、寧ろ個人中傷に近いまでいわずもがなの例をあげて述べたが、それは

反面既成の常識とか慣習、道徳に反撥する、カクネのない詩人性を昂揚したまでである。

ロンブロソウの「天才と狂人」ではないが、彼のハイデルの行動と背信は豆萩に於てのみ許せる詩人の原始的性格で、これは凡俗の徒の真似し得るものではない。例えば

A 気がいゝを真似てびっくりさしたろか
B 狂人の目に間の抜けたやつばかり
C やけくそにならんと花も見に行けず
D どころ／＼と貧民窟へ陽が落ちる

の四句を取上げよう、既に読者は筆者の意図を汲みとられたことと思うが、前半のA・Bの二句は狂人の句で、豆萩の自作短歌「このころ／＼と違えば気がいゝ……」と通じあうところの豆萩自身は内部にある狂わしいディオニソス的の性格を予感して、一般周囲の常識・道徳、などの既成觀念を破ろうとする意図がみえてくる。しかし彼のディオニソス的詩性は現實に生きる豆萩という人間に阻まれてしまう。即ち気がいゝを真似して世間をアツとびっくりさそうとは、ふと思つてみるだけで、その真似が出来ず、やけくそにならねば花見にゆけない己れの生活の矛盾を思うと、やけくそにもならず花見にいったらかと思つて結局花見もしなかつた常識田圃の好々爺豆萩という人間が浮びあがつてくる。(Cの句意を裏返した解釈になるが)。

結局、彼はBの句によつて狂人を意識した彼のディオニソス的詩人からみたらしといつても、こいつもふぬけて間が抜けていた。ふぬけた間の抜けた豚共からは逆に本当は狂人になった豆萩を遠巻きして、息をつめて凝つてゐる。そして彼は陽が落ちかける淫靡で人生に暗く貧民窟からドロドロとした空気を吸うドストエフスキーのように彷徨するのである。(Dの句)彼はキラビ

やかな、場所よりも、暗い陰惨な場所を好んでゐる。

私は彼の自宅を知らない。しかし文通には阿倍野区旭町とアドレスがあるから、それは近鉄デパートの向側の山王町の元飛田遊廓に通ずる細いインチキ通りである。両側には、いかにがわしい安物の白粉を色濃く塗つた女性が嬌声をあげている。夜も更けたら、ボンビキが低声でささやきかけ、オカマが咽喉はとけをあらわして辻々の角で女装を粧うて立っている。寄席、映画館(入場料三十円)パチンコ屋など騒々しく、街のアンちゃんやゴロついている、南大阪の魔窟であつたのである。彼の句が、これら虐げられた人生の裏街道を歩く人を対象にしているのは、決して偶然ではない。彼は既に二十年近くも(推定)現在の住居をかえないのも、彼はそれら社会悪の中に、寧ろ人間の赤裸々な眞実の姿を追求していたのだ。

果して眞実を追求するものが狂人の目であらうか。豆萩を私は何も狂人あつかひにするのでもなく、正直なところそれほど文学的な意味での天才とは考えられない。しかし豆萩は、人生を、人間を、突きつめ思いつめる狂人の目を持つ、柳界に於ける唯一の詩川柳作家として高く買いたい。彼が文学ジャンルの上からいって短歌を断ち川柳に走つたのには、彼には彼なりの理由があつた。現實に於ける豆萩という人間は、一般庶民になりきつてゐる人間として余りにも弱気でありすぎたのだ。その点、阿呆のように無関心——別の意味では善良——であり、蛇のように賢いく、狡く、適当にごまする世智にもたけていて言える。それは豆萩自身が一番よく知つてゐる。故に彼は自己嫌惡に陥る。彼は彼の詩人性

を自らの人間性(現實)にぶつつける。或いは豆萩自体の肉体内にある矛盾、反撥、相剋が染む散文性に噴みついていこうとする。しかし彼の詩性は逆に散文の返り討にされてしまつた。そういうところが、豆萩の作品であり、そこが私の狙う詩川柳理論なのである。(註・3)

(註・1) 邦国詩壇を例にとれば、春山行夫のボエジー作品「白い少女」は抒情詩の主知的構成による作品であつた。春山行夫も亦、佐藤一英の抒情を賞揚し、朔太郎のディオニソス的のロマン戀愛詩を否定した。このように抒情詩人は少年期から中年期以後になると極度に芸術至上主義的な傾向をとつて西脇順三郎、北國克衛などの純粹詩に入つていった。この派は完全に人間性を否定した。其頃人間性を肯定しヒューマニズムを低流に持つた詩人は超現實主義詩を作詩した。吉田一穂、上田敏雄、滝口修造、岡崎清一郎、など。従つて北原白秋の「近代風景」から出た「詩と詩論」は芸術派の運動で、当時、春山行夫、竹中郁、近藤東、三好達治、北川冬彦、北園克衛によつて創刊されたが、後期に入つて、「詩・現實」による人間派(生活派)に分裂し、三好達治(萩原朔太郎の弟子)安西冬衛、近藤東、井伏鱒二などの寄稿もあつた。

(註・2) 二流の映画館で暇つぶしに観たが、監督渡辺邦男の「忠臣蔵」で大石良雄が長谷川一夫、主税は川口浩の配役であつた。余談になるが長谷川一夫の内蔵助は貫祿不十分とみた。やはり阪東妻三郎(故人)猿之助に落ちる。

(註・3) 「詩人と川柳家と詩川柳」二月号稿、参照。

国文学解釋と鑑賞「川柳大鑑」による

布部幸男

を、川柳の本質以下、川柳のあゆみ、川柳と日本の文学などの項目に別けて、いわゆるその解釈と鑑賞に使っている。

私は今その内容や解釈についての評言をしようとするものではないが、その項目の一つである「現代川柳諸派の主張とその批判」を讀んでみて感じたことにすこしく触れてみたいと思うのである。「現代川柳諸派の主張とその批判」は、あらかじめ指示された事項である。

- 一、わが社の主張
- 二、古川柳について

の二つのアンケート風なもので、大體一番長いものでも六百字を出していない。だから何れもがやや抽象的であることは否み難いわけで、それぞれの発行柳詒の最近号表紙が写真版として挿入されて

いるのが、その短い文章のアクセサリーともなっているのである。

現代川柳諸派というのは「川柳雑誌」以下全国柳詠中比較的に知名のもの十七社で、また発行基礎のしっかりしているものを網羅していることは当を得ていると思ふ。しかし私は寡聞にしてこれ以外にその諸派に該当する柳詠の洩れているか否かは知らない。

わが社の主張

する文芸の存在を認めている、伝統は我々が作ってゆかねばならない、僕の最も嫌っているのは、伝統の語にあまんじて所謂既製品のくり返しである。そうかっ
 と言って現在の革新派は地に足がついていないので賛成出来ない——」といっているし、また「天馬」の河野春三氏は「川柳は從來考えられていた穿ちや諷刺や

笑いばかりがその本質でなく、広くイロニシユな角度の追及による人間性探究、社会諷刺の短詩であるべきである——」ともいっている。この二つともに古川柳を否定しているかのようにあつて、実は古川柳そのものの全面的追隨だけを忌避しているのであつて、いわゆる川柳否定の革新派でもなささうである。

次にその古川柳の伝統を如何にして「現代に対処」させるかという点になると、「川柳雑誌」の麻生路郎氏は「人間生活を深く掘り

下げ、閑海治の詩として純正な川柳を創作する」という主張と、「一番傘」の岸本木府氏の「伝統を凡そみしてはならない。それを口伝とし、開拓はおのおのの近代感覚に、躍がなければならぬ」という主張。そして「ふあうすと」の楳元紋太氏の「人間が人間として社会生活を営む以上中間を中心に万般を考える立場に我々は立っております。ですから民主主義の現代は私共の川柳は水を得た魚のようにあるべき文芸であります」この三社三様の表現形式を代表としてはほぼ大同小異である。この三つの主張のうち「純正な川柳」や「口伝としておのおの開拓や中間を中心に万般を考える」という主張にはそれぞれのニューアンスがう

かがわれて、まことに興味深いものがある。「川柳丹若会」の前田雀郎氏は「つまり俳諧の平句の心持に立って川柳する」というのと、「現代川柳」の吉田機司氏のと、大衆自らが作る、誰にも判る、愉しい庶民文芸」がいい対照をなしているが、「川柳研究」の川上三太郎氏の「わが川柳の領域はすこぶる広汎であり且つ深い。従って俳句を除く十七音を原則としたものは、その発想、取材、表現の何たるを問わず悉くこれを抱擁し——」というすさまじい意気のものもある。俳句以外の十七字音といえは「しなの川柳」の石曾根民郎氏は「川柳と俳句とはお互い違った経歴と性格を持っていることが解ってくれば、他のジャンル

川柳とは何か

―川柳の作り方と味い方―

送価
二
三五
二〇
円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。

絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新詩であるその川柳がいかにして發生し、經過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雜誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

詠 近 舟 同

をおかさない態度と度量を堅持すべきで——」と言つてさらに俳句と川柳の相互理解をいい「この根本理念に遇ふことによつて今日の指向が顕示される」と結んでいる。川柳誌の主張に「俳句」が持ち出されていることに、私はなんだか川柳の宿命の暗翳を見つけたような心持がしたのである。『平安川柳』を代弁して私は「川柳発生の意義を尊重しその宿命と伝統を現代人の生活環境のように継承してゆくためにわれわれは俳句によつて今日の世相と対決してゆく」といいその上に「ひろく深く庶民性の内省を追究するとともに川柳の新時代に対する開花を期

待する」と言つて置いた。以上断片的にコッピイしたのでそれぞれその主張の中心点を逸しているかも知れぬけれど、大体において十七代表誌の主張に眼を通してビツクアツクしたのでから間違ひはあるまい。ただこれを通じて私の思うことは、御覧の如く各誌ともに甚だ抽象的な「川柳の把握」とも見らるる川柳概念の多いことで、基本的な「川柳理論」がこの「わが社の主張」を通じて語られなかったのは甚だ残念と言わねばならない。そのことは以上諸主張の根柢ともみらるる「古川柳」の認識如何が重要なポイントとも思われ「川柳の定着性」の基礎となる「古川柳」に対する以上十七柳誌の態度を引つづいて検討しなければならぬ。即ち第二の「古川柳について」である。

古川柳について

「古川柳」については、川上三太郎氏は「アヘンのな味」といい、また岸本木府氏は「古川柳の神髄は輝いている」とし「川柳きやり」村田周魚氏は「表現の妙味と言葉の含みを研究して学びとる」また「川柳ころ柿」の雨宮八重夫氏は「包蔵されている論理性や、抒情性は現代川柳の原動力としてとりあげる」ともいっている。以上のように十七人がみんな

「古川柳のいいところは認める」という観点ではいいしよである。しかし麻生路郎氏は「その中から作句上に血になり肉になるものを摂取したい」といい石曾根民郎氏は「この伝統をいかに現代に生かすか、それは川柳の将来にもつながる私たちの愛情」大野風柳氏は「古川柳は川柳作家の常識であるから目を通す必要」河野春三氏は「江戸時代の被圧階級のレジスタンスのほとばしりであったことを証明」だから「厳しく見きわめて」と言っている。

大正初期に唱えられた「古川柳抹殺論」や「川柳という名義返上」などという物々しい議論や態度の片鱗も見られない。ただ「古川柳」の森脇幽吾氏が「単に時代的な人情風俗という本質的にみて二義的なものに力を入れるというのではなく、もっと川柳の本質に触れ現代川柳の血脈につなぐ——」といっているのは川柳でなくその研究者への一矢と見るべきであらう。吉田機司氏の如く「当時の風俗習慣を知るための好資料、文芸的にすぐれたものもある」というに至つてはアツサリしすぎて柳誌としての面目がな

るなかに「末摘花」や「狂句」の含まれていることへの憎悪で、ほんとうに価値のある「古川柳」と、この川柳作家の憎悪の眼に射られるであらう「古川柳」の整理が未完成のようである。

私は「すでにもう作句形態のシンブルとして以外に今日の時代相からは遊離した存在である古川柳研究それ自体はともかくとして、古川柳の精神や理念までを云々することは、現代川柳作家の常識以外のことにしたい。古川柳一句の生命は読んで判断してそれとなくさんである」と、われながらすさまじい限りである。

以上ただらとここまで来てしまったが、振り返つてみてそれは私の私なりの「解釈」であることに気がついた。引例した文中には一字句原本を誤り改訂したものはないけれど、一びきの魚でも両断し三断すれば自ら味覚の異つたものとなる理である。そのことを謝したい。

ペンを握くに当って考えることは、以上十七代表誌でもいいし、また各作家それぞれでもいい、競うて「私本柳樽」をこしらえ、この次ぎの機会に大いに「古川柳組上」を愉しんだらどうであらうかということである。

松山市 前田 伍健

大阪市 石田 沐天

思う壺見せずゆくり喫いつける

元赤線またの御縁で今晩は

先生のモメ運動会にはあらず

ワンマンは遂に伏見へ月詣り

民謡のわからぬ文句あるもよし

モダン派のビルの上にも稲荷住み

須坂市 高峯 柳児

今治市 長野 文庫

ちっほけな汚職場末で酔せられ

貸付でこの野郎とは思えども

蟻の列譲り合つては立ちすくみ

単語ではない流行歌暗記中

牛の産そろばんづくで気を使い

代議士になって歩かぬ人になり

和歌山市 秋月 宏方

今治市 月原 宵明

労基法あるとも知らず水車

道化服脱いで屋台で酔うている

塗つて匂わせてきずものの娘と見えす

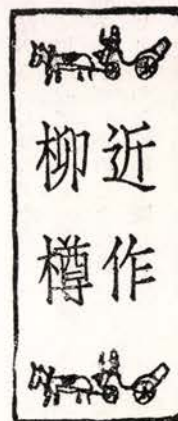
小学校の帰りおおい船方さん

人間あるかぎり食料尽きぬ蚤

すつぽりと脱がしめたサックドレス

ロカビリーちと精神も疑われ

しかし以上を通じてうかがえることは、古川柳と総括的に言われ



麻生路郎選
北川春巢選

茶漬け好きの妻に家計を支えられ 大阪府

平沢 保美

私だけの意見と老獺ぶりを見せ

同

癒ゆ程に癒ゆ程に詩情へ遠ざかり

同

看護婦の監視を受ける程に癒え

同

奥さんに相談せいと見くびられ

同

役得の胃病も直してやる健保

同

仲よしの縹緞の悪い順に嫁き

同

盆おどりのしはたちの頃の帯 岸和田市

内藤ささ子

耳の遠いくせに話をききたがり

同

痛くないように人形の髪を梳き

同

飲まぬひとにのんだと思て貰 いなほ

同

通り雨喧嘩祭りを派手にする

同

恋捨てた女に 早い秋がくる

同

紹介状名刺に書いて 追っ払い 岡山市

宗高矢寸志

落ちぶれた友へ話題が見附からず

同

惚れている癖に天気のことばかり

同

新婚の友へ

新しい門出タオルも歯ブラシも

同

女房の里で今だにかしこまり

同

✓ 正論は敬遠されてくたを巻き
手ぶらで来い手ぶらで来い謎を 石川県

同村 虹要

世も末じやなとロカビリー から 帰り

同

フアツションシヨウが からだ 拘られてた

同

水枕いい嫁もろたなと思ひ

同

小児科の玩具をパパがこわして来

同

寝そべって就職虎の巻を読み

同

蟬時雨只今この家午睡中 平部市

上林 粗影

キリギリスよ日本脳炎早や三号

同

盆踊りお宮の由来など知らず

同

盆法要半分は暑さの御挨拶

同

カンナ赫々夏まけの子のテンカ粉

同

緑蔭の憩い荷馬車もサラリーマンも

同

信仰の自由が病む身に押寄せる 美奈市

安平次弘道

秋の夜を短かくさせるバイの音

同

案山子コンクール雀逃 はよこ 逃げまい

同

台風は一面記事から暴れ出し

同

松茸の走りは社用の宴で食い

同

トラツクを逆さまにして夕刊記事 見島市

伊丹柳瓢子

屋敷をする長男のあばら骨

同

口紅をゆがめて意地のありつたけ

同

長生きをテープレコーダーへ帰り

同

敗戦のラッパで寄せる紙芝居 小松市

同 関戸宗太郎

サロンパス妻に貼らせて叱られる

同

巡業になると横綱強くなり

同

プロバリン見付けて呉れ たて 飲み

同

アトリエが出来てスランブ また 続き

同

お隣りの姑を姑悪う言い

同



毎日柳壇へ

お誘い

早川 清生

現代川柳を見るくらいなら、夕刊のウツ横丁を読む方がおもしろいという意見が一部有力短詩人の間でささやかれているとしたらどうなさいます。川柳を単なる皮肉か、せいぜい娯楽雑誌のユーモア川柳程度にしか評価しないといつて世間を責めてみても、何ら現状を打開することにはなりません。世間など相手にしないで自ら楽しんでおればよいという考えは、川柳の文芸としての価値をいよいよ低めるだけです。

短詩の仲間になえ川柳が正當に理解されていらないことは十二分に考えてみる必要があります。本来民衆の中に生れた川柳が民衆から遊離しそうな形勢にあります。川柳を低俗な古くさいものだとする通念が世間一般にあるなら、これを正すことは私たちの務めでもあります。今までそれが怠られてきたことに強い不満を感じます。将来にはぜひ川柳人だと称すときに私たち自身が身の内に誇りを感じるようになりたいたいものです。

世はマスコミの時代だと言われ



配膳車も一緒に連れて来る 貝塚市

杉本 一鶴

逢って来た嬉しさ障子に指をつめ

同

西瓜をさげて見舞は汗と来る

同

油虫コケシの頭を禿にする

同

義理がたいお人二代目に報い

同

あきらめる恋はずたに裂く手紙 大阪府

板東千代美

恋乗せてボートは波にさからわず

同

惚れているしよささえ板につ から 歳

同

停電へ師匠は三味の糸をつぎ

同

潮花さんへ

同

花道はあなたに遠いものになり

同

クイズ的知識分秒まで覚え 兵庫県

永尾 永断

鍛入りの婿を肴に追加させ

同

肉体が資本通勤眠て通し

同

犯人の如く記者から取巻かれ

同

バラバラの女体と彌次が先に決め

同

目葉のこぼれる頬の母の皺 玉野市

伊原 明林

釣りに来てまでも課長に氣を使い

同

他人様がほめる夫をしげしげ見

同

フアインダー妻の小皺へ二歩さが が

同

嫁ぐ日を母に背中を流される

同

チツプ見て三味弾くだけで唄が出ず 大阪府

米田 美夫

上の娘と歩けば奥様かときかれ

同

もう一ぺん欺まされたと貸 して くれ

同

ほんとうのママの年をみな知 ち

同

主人が主人がと言う奥 さ 尻 に とき 大洲市

横田 放人

ロマンスに遠い木蔭の老夫婦

同

メーターで炊事洗濯風も買

同

禁煙が続いて節酒すすめられ 笠岡市

高木 桃里

置き薬かくして医者呼んで来る

同

日焼けした顔へ焼酎よく廻り

同

再起への実印里で説き伏せる

同

映画出て別れを惜しむ何か食 べ 滋賀県

土守 蜻蛉

いずれ返える金だと選挙費に使

同

売った山買戻す程持ち直し

同

出戻りの女と見えぬ首輪の金

石川 ひさみ

ひとり住む気易さラジオかき寝 豊中市

同

恋すてて芸に生きるともう言わ ず

同

赤線が姿を変えて再軍備

同

川風で逢えば明治のままの恋

同

動物はきらい孤独もまた嫌い 大阪市

板東 若芽

原爆のラジオ聞いている涼み台

同

おもむろに医者飲み過ぎと疲 ます

同

末っ子と歩けば姉の子がひがみ

同

名前だけ二号で男やしなわれ 天理市

岡田花奈女

頭痛膏はって母さんジャズを聞き

同

母さんもやはりデザイン気に し くい

同

良妻で通り浮気は許してい 小松市

同 位守正柳子

天寿を惜しむ弔辞の義歯さ し む

同

百円の不義理が歯科にある痛 み

同

行商婦帰る家あり背な軽し

同

御祭神いずこにおわす靴まつ り 尼崎市

同 吉本 菁風

凡人の禪はしびれを悟るだけ

同

ヒゲソリ後に

アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲソリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

明色アストリンゼン

桃谷順天館

ます。マスコミの波に乗るか乗らないかで物事の成否が分れると言われます。マスコミの上には現代の欲望が怒濤のように押し寄せています。川柳の性格上私たちはもちろん虚名を狙うつもりはありませんが、マスコミの持つ力を正しく認識し正しく用いることは大切だと思います。

かねてより毎日新聞が貴重な紙面の一部を川柳のために割いておられることは近來の快事でありま

す。読者の憩いの場として川柳を採り上げられた炯眼に深く敬意を表するものであります。もとより編集者の意図せられた成果は十分に上っているものと信じます。

これを私たちの立場から見ると、毎日という大新聞に柳壇が設けられたことは、私たちと世間との間に強固な橋が架けられたことだと思えます。今まで川柳作家と



入社半年もう武者小路も物足らず

片親で盗汗の事は言わず置き

植木鉢いじり老後を清く生き

恋人の激励登山や々と出来

山登りコースに朱線して眠り

焼香へ二号の指輪よく光り

テレビ買う話をくしやみと飛ばし

死にたい言うのがホリドールを恐れ

コービーがうどんなに変っている二人

句の種にする気の香具師とひっかかり

お酌する術も知らずに侍りおり

いつか又プラスになると画も習い

七夕も旧にしますとあまのじやく

きうりもみ娘の味の日曜日

しまつした倍をあんまに取ら

不渡りヘガラガラ屋台の折れる音

既成品のおかずで済まぬ人が来た

久し振り逢えば夫を変えていた

丹念にメニニューしらべて蕎麦と決め

叱られていて童謡を口ずさみ

夏痩せの手で糠味噌を掻き回し

干瓢の出来球場が狭められ

貧乏はどこに世はみなデラックス

チャンバラの映画が呼きな

水爆はつくまノモアヒロシマズ

ソフトクリーム愛のこぼれは知らず

残業よりビール代が高うつき

岡山県

同 佐内 隆文

同 同

同 同

同 平田 実男

同 同

同 同

同 同

同 久米奈良子

同 同

同 同

同 須藤 俊江

同 同

同 同

同 同

同 小倉美音子

同 同

同 同

同 同

同 田口 表彦

同 同

同 同

同 同

同 横山 一声

同 同

宿題をためて漫画を読みつづけ

のぞき見のテレビへす 邪魔になり

久し振りに帰郷して 四句

恐かった土蔵の南京錠をなで

冷素麵兄嫁の愚痴ききながら

稲の出来賞めとき貰うあてがあり

チャン付 呼び合い今夜飲む相談

夏休みのらりくらりと金が要り

お役所のサービス弘報車でとなり

犯罪で秀才だった過去が知れ

暑がりの癖にパーマは苦にもせで

里帰り子を押しつけてレース着る

断った獅子舞足で開けて去に

フルベースチャンスの時に僧が来て

叔母さんもここで生れた盆が来る

野球拳こんなものにも選手権

橋筋に出て保護色に居る二人

食卓のなすびの色に詩を感じ

夕やけをバックミラーへ受けて帰路

手のたこは伊達じやおまへに左官

ピンボケを詫びて友から写真着き

冷めたいとだけほめられて西瓜

鏡台へ坐ってる間に炊飯器

木蔭今土工が昼寝する暑さ

子の買うてくれた浴衣をふれ歩き

教え子にバイク運転教えられ

岡山県

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

お知らせ

バックナンバー御入用の方は、
往復ハガキでお問合せ下さい。

川柳雑誌社

社会のつながりは実質的に殆んど
なかったわけですが、この橋を一
つの突破口として世間に川柳を推
し上げ、川柳の本質とおもしろさ
をぜひ認識して貰わなければ、毎
日新聞社の折角の厚意を無にする
こととなります。

今まで新聞の柳壇から多くの作
家が生れました。新人の登竜門と
しても柳壇の価値は大きいのです
が、何といっても川柳のPR部門
として、川柳と世間を結ぶ窓口と
しての意義の方がはるかに重要だ
と思います。世間に向けて唯一の
門が開かれたこの天与の好機に際
し、この機会を失わないことはも
ちろん、より大きく育ててゆくこ
とは私たちの最も大切な仕事でな
ければなりません。

毎日柳壇には川柳その他でなじ
みの顔が次々と見えて楽しい極み
ですが、いわゆる大家の投句が最
近やや減少の傾向にあるか見え
るのは残念なことです。川柳とは
こんなにおもしろいものだと思
うの方に知って貰うことは、新人中
堅の人はもとより、経験豊かな大
家の義務である筈です。沽券とや
らがあるなら匿名でも結構、川柳



朱の色に染まり田舎をすててゆき

セーターで書いたと避暑の軽井沢 大阪府

魚河岸の鰯の姿勢で安静し

せき込んで来た面会に借りられる

建築のカタログ集め建ちもせず 広島県

旅なれたほうは陽かげの席をとり

看板の通りへんこつおやじが居

月賦済までのアフターサービスか 岸和田市

おみやげのように検便さげて来る

食堂車行儀咎める眼と出合い

十代の母折鶴一つもてあまし 水見市

日や止め塗つたソバカス浮く暑さ

営業用襟足ハート型に刺つといて

想像を生かす苦心の漫画集 八代市

燃え過ぎる恋人生を踏み外し

理解なき家風に嫁して里恋し

新妻のテレビ料理に夢中なり 大蔵市

病人の残りで母はすましとき

ミシン踏み音にナイターが消され

陳情の帰り使う金を持ち 小松市

入院の古参人生観を解き

いにしえを読む仏壇の螢光灯

冷房を出ればやっぱり夏の街 伊丹市

冷房中押し込むように戸が締まり

火を焚いて二泊三日を送る夕

金が出来趣味の相違に気がつけり 貝塚市

同

半田 夏生

同

同

杉原 愛鳩

同

同

中野三四郎

同

同

関 す頭女

同

同

永松 道雄

同

同

堤 勝三

同

同

万仲 一進

同

同

小川静観堂

同

同

護川 梢月

遺体揚らず三角波が飛ぶばかり 大蔵市

汚職代議士

証拠いん滅終えにこやと縛につき

原爆天主堂収壊し

のどもとを過ぎて悲憤を反古にする

臨海の寝ざまの悪い子を想い 笠岡市

ボーナスも鶴匠のように取上げる

盆栽の鉢のしぶ味を賞めてくれ

開け放つ肺が冷たい部屋にする 和歌山県

孫の顔覗きに別居折れて来る

同業の値段を客へ聞き合せ

虚礼廃止言いつつ持って来る取り 大蔵市

末席の意見で審議をやり直し

吉野山観光

吉野山葉ばかり見せてよくかせぎ

宿題がピンチヒッター呼びに来る 若松市

客の酒飲んで女給ののけよう

健康に感謝してます左遷の身

北陸ハネムーン 二句

永平寺しんどしんどで廻って来 大蔵市

気前よく予備費も使うハネムーン

十二色皆んな使うて子の花火

映写幕恋はもつれるものと知り 大蔵市

騒音の防止へ派手な宣伝車

右も左も名勝古蹟にしてガイド

男勝り忘れ物したことになれ 松山市

同

同

同

同

出原 真奇

同

同

同

木下 一休

同

同

同

河井 庸佑

同

同

同

同

同

堀 須賀太

同

同

同

同

同

同

を挙げて、否流派を超越した全柳

界の力を結集して、川柳発展の大

目的のため毎日柳壇を盛り上げて

ゆきたいものです。

修養に窓口談義

久米奈良子

九月一日の朝、ラジオで病理学の権威緒方知三郎博士(73才)のお話を心打たれたのですが、午後に着きました本誌九月号では路郎先生の窓口談義にまたまた心を打たれました。毎号路郎先生の窓口談義を修養書として、感銘深く読ませていただいております。

川柳雑話による現在の俚せを、今なお病床でもすべ暗くなり勝な日を送っている療友に、私のよろこびを伝えたいと思います。路郎先生の御健康を祈り上げます。

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話の三三四四番



イエスカノーかと仲人のせつかな 宇部市

税金を値切つて飲んだツケがくる

夏まけが目立ち一そうヒスらしい 青森市

戦争をとうに忘れてイモを食い

アベツクは雨にもめげず風にもめげず 今治市

父の夢母の夢保育園屋寝

石橋を叩いてこそ金の出来 岸和田市

冗談を解せぬ才女にも困り

親切はお受けしますと断る気 笠岡市

働かぬ采配通りにはいかず

招待につられてバスに酔うただけ 京都府

むし暑い夜は蛾までが憎うなり

経験と理論ここでも対立し 兵庫県

わら屋根の下で電気飯をたき

涼台雨はしに居る倦怠期 大阪府

お茶席へ出る白足袋は別にもち

貴洲さん男子出産

母ちゃんともう言えそう口で吸い

洗濯をして外出の手を磨き 堺市

おべんちゃらいうたら好意寄る

傷心を秘めてピエロの振りをする 豊中市

自信なく跳ねた桂馬で投げよった

じれつたい程空いた席を譲り合い 大阪府

高級なスリッパだからちらつかせ

別居してからの口紅濃くなり 広島県

バタ屋から聞いた漢方薬が効き

死んだようになって農家の嫁眠り 鳥取県

牛の声積んでみどりを貨車がゆく

岩原 滔川

同

同

工藤 甲吉

同

越智 義夫

同

植山 武助

同

木山 二路

同

都倉 求女

同

藤本ゆたか

同

竹内花代子

同

同

沢田 美喜

同

林 岡男

同

谷沢 好祐

同

平田 越舟

同

鈴木村諷子

同

孫要らぬと言つても見待つても見 大阪府

飼犬をほめてほしさにひきずられ

尺玉が揚り淑女も口をあけ 滋賀県

肺切りのチャックの長さ計りあい

小鳥飼うゆとりも孫が出来てから 宇部市

一滴が何万円にもなる涙

お多福になる日をベッドの上で待ち 貝塚市

表替えした日は猫の足も拭き

公然とビストル持てる職で生き 大阪府

ハイボールマダムは自称未亡人

にやにやしていると思ったらトラウマ持っていた 兵庫県

売り掛けがよらぬかやけな飛べよう

運転手の苦勞へガイド笑わせる 玉野市

昼寝して居ても土用の汗流し

娘の縁談決めて後添い欲しくなり 西宮市

月給の話になると寝てしまい

豊作の夢を娘が一人占め 笠岡市

豊作へバアさん石碑を建てる夢

タイトルの端役にかつての大スター 大阪府

条件をだんだん減らす嫁きおくれ

酒好きの幹事で下戸はほっとかれ 西宮市

養子しか持つて来ぬ叔母に腹が立ち

よれよれのシャツが気になる洗濯屋 鳥取県

口論の末は鏡で泣いており

縄張りもあつてゴミ取る職に生き 大阪府

鉢巻をすると助手席荷を運び

不漁の日釣れぬ男とうまが合い 愛媛県

ロマンスを父母にも聞かせ家平和

萬代句念坊

同

奥野 正一

同

神田 豊年

同

不二 道子

同

本多 清人

同

河原みのる

同

小谷 仙山

同

山本 一傘

同

谷本鈍愚坊

同

豊島 恒子

同

中橋川太郎

同

土江 基保

同

保田 華甫

同

鳥井 川鳥

同

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円

送料(二冊分)八円

路郎先生と

夢の初対面

杉本 一鶴

しばらくのお別れに手術前逢つておきたい人もかなりありました。何かと準備に追われお伺いするひまもなく手術の当日が来ました。ふと目をさますとまぶしい程に空の青が美しく雲一つない五月晴。

それよりも私として嬉しかった事は常々一度お逢いしたいと思つて居りました路郎先生と膝を交え一刻を過ぎた夢を見た事です。

慈愛こもる数々のお言葉を頂き私の喜びは云うまでもございません。たとえ夢であれ路郎先生とお逢い出来た事とすがすがしいまでの五月晴に「今日の手術は必ず成功するぞ」と確信を持ち手術台へ臨む事が出来ました。

手術日の余裕は唄を口ず

さみ

手術は順調に済んだとの事です。が、何分共に古い病歴なれば肝切除後の苦しみは舌筆では云いつくせぬ悲壮なもので特診々々の連続。気丈夫だと云われ自他共に許



行水へテレビドラマが気にかかり 岡山県

夏休み予備校ブームが遊ばせず 同 榎原 万女

接吻の映画あたりへ気をくばり 西宮市 同 網元 慧星

良い縁談お茶を出すのもつい忘れ 大阪府 同 中西兼治郎

夏服はよくぞ女に生れける 小松市 同 筒井 吉枝

乱売と言う電気器具まだ買えず 同 小池 鯉一

待ったなしもう三十八手が届き 神戸市 同 齊藤 巖

奢らせて男の面子立ててやり 同 石井 伸生

青申の一番と言う左前 大阪府 同 荒木 狂風

日本の揉み手無くなる日が待たれ 加賀市 同 桐谷 紋六

動評に妻とは意見喰い違い 同 中田 白李

手伝った絵日記猫が犬に見え 金沢市 同 小林孤呂二

算術はわかって居れど借が増え 倉敷市 同 菊地 白葩

友情に甘え独立忘れかけ 同 木村 喜男

養老院に来て幸福な箸を取り 同 山口 白帆

栄転へ追いたてられるように立ち 同 森本黒天子

浪曲が少しうなれて親しまれ 同 千石 快人

手のとどくとこは子供にもぎ残し 同 山口 白帆

胃の痛む箸がなかなかよく動き 同 森本黒天子

僕の猪口ばかり妓すけてくれ 同 千石 快人

子を膝にのせてアベック招待券 大阪府 同 山口 白帆

仏壇の先祖代々酒が好き 松江市 同 森本黒天子

野良婦り足より先に鼻が着き 山形県 同 千石 快人

打ちあけずナースを慕い退院し 奈良県 同 山口 白帆

甲子園高校野球にて 同 森本黒天子

お金持あんな所で質素にし 大阪府 吉川 悦子
教え子は肩書の多い名刺くれ 兵庫県 齊藤たけお
上官の娘を妻にして敷かれてい 七尾市 松高 秀三
お祭においでおいでも世辞と聞き 西脇市 保西 岳詩
裸一貫今日の稼ぎの銭を知り 小松市 上野 錦水
利子だけは支払えそうな柿の出来 鳥取県 谷 無閑
男の子一番風呂をあがって来 兵庫縣 遠山 一雨
長男が片棒かつぐ墓掃除 松江市 岡崎 祥月
無遠慮な欠伸僕にもうつされる 広島県 石崎 昭二
クロイドへどうにもならぬ不伴せ 宇都市 鎮浪 翠月
来客はまた朝顔をおがまされ 西宮市 御園生 江
夏やせをしたは結局父ばかり 笠岡市 谷 一山
クシヤミ一つも彼女に結びつけ 和歌山縣 山下 光男
田満を揃い浴衣に老夫婦 西宮市 酒井 丹譚
パチンコでピースを派手に喫い 宮崎県 野口卯之助
言訳の立たぬお酒を飲まされ 広島縣 松井 可笑
納涼のアトラクションで汗をかき 大阪府 安並 十七
自然の松そのまま入れて設計し 西宮市 村上 肇
旭日の社歌へ不景気無情なり 大阪府 三上 英路
涼み台巨頭会談開催中 堺市 武田軍治郎
蚊帳の底ながめて療養のまだ遠く 西宮市 樋口 寿榮
しきたりの古さが鉄に注連を張り 玉島市 井上 旭峯
移転するたび狭くなる青写真 大阪府 米田 勝彦
看護婦の時計に合わせて朝の試歩 西宮市 富永 夢路
焼香を済ませ上衣をそと脱ぎ 笠岡市 松本 忠三
招待の膳に禁区の蝦きれい 徳山市 渡辺伊津志
音譜閉じ母に戻って単衣縫う 下関市 宮藤 慈雨
療養へ失うまいとする若さ 大阪府 国府 玉枝
年齢のこと言うなやっぱ遊びし 西宮市 村上 球絵

味の七コ
モダン 川柳
心育橋大丸北の辻東へ
御門
TEL 6684
御集会には階上御利用下さい

「す私が「手術するではなかった」と弱音を吐き術後室を一人でかきまわした仕末です。日がたつにつれ瘻のからみ方がなくなり息苦しさから少しづつ解放され人々地がつくようになつて、よくこれまで生きられたものと今更ながら背筋が寒くなる思い。」

今日あるは並々ならぬ外科医の適切な処置のお蔭とは思いますが、路郎先生の御厚情あふれる度々のお便りがどれだけ私を勇気づけるにいたしたててくれた事でしょう。終生忘れれる事は出来ません。

師の慈愛必ず治つてみせます

あらゆる障害を押し切り今月も近作柳樽へ投句出来た事を喜びとして居ります。



柳風三國志

(3)

東野大八

さて文徳は、司馬徽から孔明の話をきいて、早速その庵を訪ねることになった。

「どんなエライ男か知らんがわざわざ見貴が迎えにくことはねえだろう」とおとなしい関羽もみかねていうと、

「そんなにその人間はえらいんですかい」

と張飛も口をとがらしかした。「司馬徽先生の言葉によると、周朝八百年を興した太公望呂尚、漢室四百年の基をひらいた張良としてその智略においては孔明の足下にもおよぶまいとのことじやった」

「エラク売りこみやあがつたもんだな」

と関羽と張飛は顔を見合せてあきれかえった。

やがてくつわを並べてこの三騎孔明の住む臥龍岡へと向った。その里は猿鶴相睦み、山柴水明の清郷。とある一家の草庵を尋ね尋ねた末にたたいた文徳の前に、現われ出でたるは賢い童

子一人。「漢の左將軍宣城亭候、領予州の牧、皇叔劉備が先生にお目にかかりたく参りました」

「そんなへつたら長い名は覚えきれないよ」

「これは悪かった、予州の文徳が参ったとお伝え下さい」

「ところが先生は留守だよ」

「二歩もないその返事に文徳はがっかり、張飛は大喜び、さあ帰ろう帰ろう」

それから数日、人をやって探ると孔明在宅との返事があつたので、文徳はとるものもありあえず再び臥龍岡に向った。折悪しくその日は雪空、進むに随ひ雪はヒヒとして天地を埋めて降りしきりはじめた。

「こんな日は、天下分目の合戦も公休というのに、なんで士百姓一人をこの雪に迎えに行かねばならんのだ」

と張飛はブブリ、関羽もむつつきり。しかし文徳は独り勇んで駒の手綱を急がせたが、雪はますます降りしきった。むかしの国定教科書に、この場面の絵があつて、当時のわれわれは「劉備が三顧のこよなき知遇」と習ったものである。随つて二度の訪しに相手は留守と定つていたが、當の文徳は

気付かない。やがて馬腹雪にまみれて空しく彼等主従は引返さねばならなかつた。

雪が上つてやがて春、人あつて今こそ孔明は庵に居る、と伝えてきた。狂喜した文徳は三度臥龍岡に向った。バカも大抵にするが「い」と本気で怒る張飛に文徳はいった。

「むかし齊の桓公は東郭野人にあうため五度行つたという。釣り三昧の太公望にやつた文王は、呂尚がふりむくのを一日中立つて待つていた。釣れまうかなどと文王をばへより」という川柳、あれは川柳人のフィクションだよ」

三度たいた柴の門、童子ももはや顔なじみ、ニコやかに文徳へこういった。

「先生は今、お寝み中です」

文徳は拝謝して、そのお眼ざめまで待とうと言つた。そして文徳は、孔明が目ざめるまで二刻半もじつと待立して動かなかつた。今もむかしも、マークする人材を手に入れるまでのスカットの苦勞は

変らない。プロ野球の長嶋や王以上の天下の孔明が相手だけに文徳先生の苦心も並大抵ではないが、美女として三度のよもやにひかされるは世の習い。ついに、文徳は待望の孔明と対面するまでにこぎつけた。やつとのこと彼の目前に現れた孔明は、身のたけ八尺、面は

冠の玉のごとく世の常の人にあらざる風貌。かくて双方大いに談論したが、乱世の世を救うにはと孔明は前向きしてつぎの様に述べた。北は曹操に、南は孫権、貴方は残りの蜀をとつてかなえの足の三分の計の一つをとり、然るのちに漢室の再興を願うのがよろしかろう、と。文徳は、草芦にあつて早くも天下の三分を予知した孔明に舌をまいた。かくして文徳が涙と真心をこめての説得に、ついに、孔明は出芦を決意する。あくる日、一夜を文徳と過した孔明は弟諸葛均を呼んで、三顧の知遇に文徳殿に仕えるが、功なり名とげたあかつきは、またここへ帰つて余世を榮しむつもりだ、と言つた。後世の人が、彼のこの言葉をたたえてこのように作つた。

「身は未だ升騰せざるに退くことを思う、功成つてもまさに去時の言を憶うべし」

と。ときに孔明齡二十九、琴書を收拾して陋畝を離るというところ。かくして孔明を加えた三国志にはいよいよ筋金が入ることになる。孔明出芦を祝つて時の川柳人はこのような句を作つた。

履歷書はどうするんだと張飛言ひ

タケノコの出来へ孔明庵を出る

知遇とはいささか損もつきまとい

さて一方曹操は、呉の孫権が江東を破つたとの報に、南征を決意したが、この作戦の邪魔はその途中にわだかまる文徳、まずこれを破つてからと軍議決定。部下の一番大将夏侯惇というのに四

人の副将をつけ、十万の大軍をもつて博望城へと押しよせた。これを迎え撃つ文徳は早速孔明と謀つた。「弱輩ものの孔明奴、どんな策をたてるか、此奴は大きなものだて」

と関羽へ張飛がそういつてわらつた。孔明の策とはこうである。「博望城の左り手予山の林に関羽どのの一千の兵をふせ、敵をやりますとして兵糧隊を襲う、張飛どのの横合から撃つて出てしかじかくかく」

と細かな指示を出した。「とどこでお前さんはどうしてゐるんだね」

と張飛がいうと孔明「それがしは大事にこの城を守つております」

張飛は腹をかかえて笑つた。「おれたちは切り合ひに出て大奮斗する、お前は家の中でみづ豆でもなめているという寸法か、さてものんきな話じやね」

文徳がこれをききとがめて張飛を叱つたので「まあ、とにかく此奴のいう通りにして、それから後にカタをつけるものをおそくはなからう」

と張飛と関羽は相議一決したが、しめて四千の兵で十萬の敵を迎え撃とうというのだから話は無茶である。一方曹操軍の荒武者夏大人、いよいよみづく野郎文徳の年貢の収めどきがやつてきた、生捕りにして曹操が朝飯の引出ものに献上せんと、人馬真黒になつて押しよせてきた。迎える孔明軍師が公式戦の第一戦果として如何相成りまするか、まずは次回をおきき下さい。

古本屋の生活から

長野文庫

純情青年

一向買ひそうも無いのに色んな本を次から次へ立読みして居る男が居る、どうも態度がおどおどして居るところを見ると万引するつもりかも知れない、時々チラチラ店内を見まわしたり、カウンターの方へ目をやるとところはハッキリ方引型だから、こちらも特別に注意をして居たことは無論である。やがて店内の他の客も出払ってあとにはその男だけが残った、その時男は雑誌を一冊掴んでつかつかと私の方へ近づいて来て「これを下さい」と差出したのは何と夫婦雑誌であった。思うにこの男は夫婦雑誌が欲しかったのだが他の客の手前一寸恥ずかしがって買ひそびれて居たのだと分ったが、今時珍しい純情？ 青年と思われ

る。立読みは漫画買うのはエロ雑誌
「これもついでに買つて貰おう」と声を落としてつき出したのは新聞包みに紐のかかったエタイの分らぬ代物である、場所は古本を買いに行つた某家の書斎で町では一寸した紳士の家である。「何でも頂きます」と紐を解いて中を開けて見るとそれは騰写版印

置場なく

「手紙文の本はありませんか」と女の子、
「これは如何です」と二三冊出して見せたが、気に入らない、「もう外にありませんか」と物足りなさそうだ、
「今この程度のものしかありませんが」
根堀り葉堀り尋ねて見ると「あのう、ラブレターの本が欲しいのですが、何処の誰がこの人から手紙を貰うか知らないがさそ名何名文に感心することだろう。」
手紙本通りに書いたラブレター

作者は誰

庶務課の一社員が式辞演説挨拶集と云う本を借りて来たのでその訳を聞いて見ると、
「部長が明後日某家の結婚披露宴に出席して祝辞を述べるとだそう

だが、その祝辞を書いてくれと頼まれたのでその型を探して来た」との話である。「二三冊探して見たところその中の一冊に丁度そのものズバリの名句があった、彼は大いに喜んでこの文句を写して帰ったが、そのままの美辞麗句がさぞ披露宴で拍手を浴びたことであらう。この席に列席した他の人々は恐らくこんなこととは知らないから部長さんの名調子に感心したことと思う、部長氏は依頼した社員の名智名文に感心したのであらう、或はその社員の出世の緒になつたかも知れない。社員は名文を丸写しに写したその著者に感謝したに違いない。

来賓の祝辞何れも同じ型 本屋利用の金儲け法

百円の雑誌を発行即日古本屋へ持って行けば八十円で買つて呉れる、これは大抵の古本屋では資本用の雑誌を一割引程度で卸買をして居るものだから八十円なれば買取ってくれるものだ、この場合売る方は二十円の損害だがこの雑誌を二十日ばかり経て買戻せば五十円で買えるから差引三十円の利益となる、現に私の店へ毎月文芸春秋その他の雑誌を持って来る男がある。この男は新本屋から掛(後払い)で買つて来るのだから資本は一円も要らない。これを一寸覗いて見るだけで即座に売却する、そうして一カ月ばかり経てその本を買戻しに来るが一カ月も経つと他からも新本同様の新しい雑誌が入るからそれを五十円で買取つてゆつくり読む訳である。その男の説に依ると「毎月雑誌を数種購読するのだから書店に信用が

出来る」「年末年始に聊か乍ら贈り物も呉れる」「時には本屋が記帳を忘れて誌代の請求をせぬことがある」「これはまあ当てにはならないが」「兎に角金儲けにもなり雑誌が定価以下で手に入ることは確かだ」
ミニミッチイ話ながらこんな利用法もある。

盲点を衝けばあります金儲け

賣店の句から

— 実感の強さ

不二田一三夫

場末の映画館で妻に売店を経営させているが、こや(劇場)の名があるのに、「スワル座」という愛称? を客がつけてくれた。

大阪千日前のスバル座はロー・シヨウの洋画館として全国的にも有名だが、そのモデル映画館「スバル座」をもつて、いつもガラガラで、いつ来ても「スワル座」とは、うまく考えやがったと感心させられた。

句会で「売店」という題が出る

と、いみじくも句がスワラと出来る。

三年前の本社句会で、

売店のボロイするめが売れ残り (博也氏選)

九月の川柳忌句会では、

ラムネ冷えきって売店閑らしい (文蝶氏選)

が、ともに天に抜けた。どちらも不景気な句ばかりだがこの句にウソはなかった。

第九十回大万川柳の「博士」の入選三十九句中、私の知っている

人、つまり医師、患者、全快者、病院関係の方々で十一句もあったことは、やはり実感がモノを言ったのであらう。地方の方も入れたら半数以上はその人々で占められているかも知れない。こうしてみるとき選者の眼の鋭さに頭が下がる。

★ 商品のキャッチ・フレーズを募集する場合にも、かならず規定には実感を強く求めている。

「カルピスは初恋の味」
これは飲んだ人が、甘い、そして酸っぱい、あの初恋の味を舌に感じたのであらう。花王石鹸の「うぶ湯の時から」の句と共に、名句の双璧である。

昭和25年に一等三十万円の賞金で、また「カルピス標語」を新しく募ったことがあった。応募数二十五万の中から選ばれた句が、「いろいろ飲んだが、やっぱりカルピス」このなんでもない平凡な句だが、これこそは実感なしでは生れない「ことば」である。

川柳家歓迎

趣味の集りに、吟行に、御宴に御家族連れのお清遊に御利用下さい
風流御好み料理
すき焼・ちり鍋

紅葉の名所龍田大橋
下車半丁

どやまのふもと

竜田川畔

竹荘の店

竹青の店

秋 春 筆 雜



隣りは 何をする人ぞ

須崎 豆 秋

芭蕉の名句をもじった、いとも上品な題を課せられましたが、俗臭紛々たる答案なので、まことに恐れ入ります。

★

戦前のことですが、引越して米られてから一年もの間、隣の御主人とは未だ顔を合せたこともないし、又何をする人とも知らずに居ました、(地方のお方は、そんなバカらしいことがあるもんか、とお思いでしょうが、大都会の住宅地域にはこういうバカげたことが本当にあるんです)、その隣の御主人が一週間程前から行方不明になって、奥さんや町内が心配して居たところへ突然兵庫県警察署からA(隣の御主人)を帰してやるから受取りに来い、という通知があ

ったので、私も丁度会社休日だった

ので、奥さんの代理で署へ出頭しました、さっそく私は地下のうす暗い刑事室へ呼び込まれ、主任刑事から頼るていねいな態度で「遠い所を御苦労さんでした、実はAは甲子園で野球トバクをやって居た現行犯として、署へ留置してありましたが、本日シヤク放いたしますから、あなたが身元引請人となって連れてお帰りを願います……」と云ってAさんを引合せてくれました。

「Aさんですか」

「そうです、而しあんたはんは、どなたさんでしたか」

「隣のSですが」

「それはそれはお初めにお目にかかります、本日はまことに御苦労さんで恐れ入ります」

ってな珍問答を横でソートと聞いて居た刑事さんも、禿げに悪人はないということ、よく知って居ますから、別に私を怪しむ様子も無しに信用してAさんを渡し

てくれました、兵庫駅までは、もうすでに兵庫附近の遊び人仲間が集まっていて、「兄貴よかったなア」「ありがとう、ビタへ遊びに来いよ」など喜び合い、ウイスキーやら煙草などを渡したりして歓送してくれました、Aさんは相当売れているビタ(飛田)の顔役であることを初めて知ると共に、この世界の温たかい仁義の美しさを見て、臉が熱うなりました、汽車の中でのAさんの所謂車中談が、とても面白いんですが、省略いたします。

このことがあってからAさんと私は意気投合して、戦時中には防空などで、私を援けてキビキビと動いてくれて居ましたが、Aさんにも召集令状が来て、町内の旗に送られて、南へ征ったきりとなりました、而し私の頭の中には、あの気味のいいAさんの顔が未だにマザマザと生きて居ります。

昨今のグレン隊などとは違つて、Aさんのような、むかしの遊び人という者は、竹を割ったようにスカッとしたところが、長谷川伸作「チボの家」の主人公みたいに町内などからも愛される人気者が多かったようです。「引越しのいっちょ仕舞の蓮の花」の句を残して、昨年亡くなられた食満南北さんは、周知の如く、転宅のレコードホルダーでしたから、いろいろと変ったお隣とおつき合があったことと思われませんが、その随筆の中にこういうのがあります。ある日、隣家でバタバタと大変

な足音がしたので、けま屋の小ぼんさん(食満南北)はお初婆に「何やね?」と聞いた、「八八やうってばたら網が下りましたらしやっせ」「そうか」と小ぼんさんは寝てしまった、夜も更けて高津の鐘がボーン「モシモシ」何所からか小ぼんさんと呼ぶ、「モシモシ」「ゲエッ」小ぼんさんは臆病である、蜘蛛一匹で飛上るほどの小胆者である、「誰や?」声はうわずっている、例の名木銀杏の上で、「ここだすここだす」「だ誰だんねんアアこわ」高坐ではなすところの落語そのままである「となりもんだんね朝まで隠しとくなはれ」声はだんだん細る、「そうか」小ぼんさんようよう気がついた、宵のお手入、その網にも入れた魚一疋「下りといははれ」押入れへでもは入りなはれ……

今考えると、たしかその礼にお酒を一升もうて、コロと太菜で一パイやった。

話は、前へもどつて、Aさんの住んでいた家へ昨年Bさんが引越して来ましたが、この大將は朝早く出て晩には遅く帰って来るので、サラリーマンではないらしく「隣は何をする人ぞ」の興味をもちつつも、未だに大將とはお目にかかったことがないんです。

秋の夜のとなりなにやら釘を打ち

これは、Bさんが引越して来て間もない、昨年の秋に作った私の句ですが、虫の音に更けわたった静けさの中に、Bさんの家から何

神経痛疲労に

リウマチ・便秘・脚氣・肺結核の補助療法にも

★新型ビタミンB1剤

アリナミン 糖衣錠

30錠
100錠
300錠

大阪市東区道修町 武田薬品工業株式会社

お隣り二題

正 本 水 客

ラツキ一の巻

ラツキイというのは純粹セパードの心算で長男ボーズが貰ってきた犬の名である。長ずるに及んで物凄く大きくなったが、耳がだん

やら釘を打つやうな音が聞えてくるので、私はフト春団治の「宿がえ」を思い出し、ソートと寝床を抜け出して、お仏壇の扉を開けて、阿弥陀如来さんの掛軸を見ました、が、別にその喉首に隣の釘が突き抜けても居なかったため、安心をして寝ました。

だんたれてきて了った。

凄くよく吠えることは近所の評判である。見馴れない人が近づいたりして、真剣に吠えたてると、御近所で飛び出してこざるを得ないという訳で、少々家を空けても大丈夫である。従って二段論法として大変臆病なんである。散歩の途中で小さな四足動物が歩いてくるとする、ジッと目をこらして見ている、仔犬だと目とコンコンと道をよける様な態度になる、ところが、もしそれが猫族であつたら大変である、猛然として吠えたててゆく。

処で、お隣りに大きな牝猫が一匹いる、塀の上や大屋根のふちを悠々と歩いている姿を下から見ているのは何としても我慢がならないに違いない。

彼にとつて月にうそぶく猫君などというものはまさに度しがたき隣人なのであろうか。

大文字の巻

八月十六日の夕方、京都の西院駅前から日会社の観光バスに私は席を占めていた、大文字の送り火をまわる貸切である。

叡山が後に見える辺りにストップする頃には、四方の山々はすっかり夜の色に包まれて了つた、車を降りて夏草の中に立ってみると、隣に佇んでいた年輩の人が、ふと笑顔になって話しかけてきた。「ハテ」と振り向くと「アユミさんでしたネ」「……わたし水客ですが」と言つたが聞か

れなかつたらしい。「鮎美さんでしたネ、私、丹波太路です」

「あ、これはどうも、珍しいところ……」

むきになって水客を名乗り直すこともあるまいと、そのまま旅行の話や川柳の話など暫く楽しく話し込んだ、娘さんとお孫さん連れのソーランバ振りである。

ふと、車の中から高校野球の放送が聞える。今頃まで未だやっているのかな、今日の最終試合は魚津高と徳島の筈だつたが、バスのステップに片足をのせかけると、澄んだ張りのある声が不意に耳へ飛び込んできた。

「なかは暑いです、今補回戦にはいって零対零が続いてますの、ちよつと吃驚して右手をみると、バスの中で隣りに坐っていた女性である、浴衣に黄色の帯を胸高に結んでいる。何のくつたもなく話しかけてきた素直さと、私が野球を聞きに戻つたのを、すぐ感じとつた聰明さが、私の心をひいた。

その時、右手うしろの闇に沈んでいた如意岳と覚はしき中腹に大文字の火がバツと浮かび上つた、「アツ」とまわりに待期していた人々の口から無言の嘆息がいつせいに上つた。いくらか美しいネオンの灯がある時代に、こんな素朴な篝火に関心が集まるのは、遠い昔への郷愁であらうか。

船形の火は左にかくれてよく見えない。

やがて、バスが市内に戻つてくると、右手ななめに近々と逆大文字の火が覆いかぶさるよう迫ってきた、パチパチと火の燃える音も聞きとれそうな近さである。

一路、バスは更に嵐山へ。暫く車の揺れと涼しい夜風に身をゆだねるうちに、正面の暗のなかへ木立が浮き出してきて、その上にくつきりと鳥居型の大きな火が、ゆるい傾斜をもつて画き出されていく。時間をはかつて車を飛ばしてきてきた甲斐のあつた美しさである。

ほどなく車は渡月橋を過ぎて川沿いに停車する。隣席の女性と期せずして川ふちへ歩が揃つた。何処の人で、何をしている人か、お互いに聞こうともしない。

遙かに遠い川上から、無限に遠い川しもへ、数限りない灯籠の火が一つ一つ点々として流れ、また、ひとつむれにかたまつて動いてゆく。まことに今宵の火の祭りを飾るに相応しいフィナーレである。暫くは声もなく見入つていた、例えようもない夢のような美しさである。

「ブービー」と帰りの時間を知らせる車の警笛が私達を現実に取り戻した。

バスに遅れても、かまわないという表情がチラと彼女の顔を走つたように思ふのは、男の自惚である。

灯と水は変らずに流れていた。とうとう流し水は過去から動いてき

ライバルは

絶えない

田垣方大

ライバルは自認したもの、周囲から押しつけられたものを含めて、一生つきまとうものである。オギャーと生れて七夜が過ぎる頃になると、産婆さんが同じ頃生れた赤ん坊の噂をもちこんでくる。

そうすると母親はもうその赤ん坊にライバル的意識をもち以後の発育状況即ち、泣いた、笑った、坐つた、匍つた、立って、歩いた、と、ことごとくに比較して一喜一憂している。それが小学校へ入学して頭脳同程度と同じぐらいになると、もういけない本人は勿論周囲もハッキリとライバルとして意識し行動するようになる。然しその成績がクラスの中位や下位ならば競争意識もさほど強烈ではないが、一、二位を争うとなると、もう眼の色が変つてしまふ。かようにライバルは幼時よりはじまり、境遇の変化によつて消えたり、現われたり、度合いの強弱はあつても、学問の、恋の、

仕事の、趣味の、ライバルが出現し墓石になるまで続くものである。否墓石になつてからでも、あの石塔(石碑)は大きい、小さいの、良いの、悪いの、と比較せられて喧々囂々土の中までは聞えぬと思ひ、遺族の迷惑も何んのそのおかまいなしに、勝手に二人をくらべて優劣を論じ合ひ、快哉を叫び、口惜しがるのである。

ライバルの形態

ライバルとは妙なものである。(一)自分でつちあげて相手に押しつけていくものと。(二)相手から押しつけられるもの。(三)当事者は何も知らず、その存在さえ念頭にないものが第三者によつて、存在条件や行動の近似点を対照し、その行動の結果即ち、成績の優劣を頼みもしないのに比較して「これがあなたのライバルや」と言われてみると、両方共なるほど彼はまさしく俺のライ

安産のため
安産のくすり
ビタミン入小粒200円
ワダカルシウムは妊娠中なるべく早目からおのみ下さい。



バルなりと意識し合うようにな
る。第三者につくってもらうライ
バルがこれである。

私のライバル

私は今五人のライバルを意識し
ている。五人とは(一)幼な友達
を、人間としての質的向上に於い
て(社会的、経済的な面も含め)
(二)は会社・同時期に入社した
友人で今は会社をやめ書店の主人
公に納まっているが、親友なるが
故に(一)の如き条件で(この友
人は終戦直後のエロ本の氾濫した
時代、此の種の本を絶対売らな
ったので有名になった男である)
(三)会社の同僚、これは技術上
の事から給料に至るまで、(四)
は川柳(五)は謡曲である。

川柳のライバル

私には川柳雑誌の川柳塔で、照
準をつけている作家がある、この
方は常に数歩先を進進していら
れる先輩なので、ライバルとは言
いが、敢えてライバルとして意
識することによって、自己を鞭撻
し、現状に安んじようとする心の
警鐘としていのである。毎月頭
川柳が届くと一番先に目をやるの
がこの方の句である。そして自分
の句と比較していつも、ハガミを
して口惜しがり、今度は負けぬぞ
と筆を締めるのに役立てているの
である。以上は私の押しかけライ
バルであるが、数年前、県下柳界
の風の便りに、某氏が「打倒方
大」を叫んでいると聞かされて、

今まで無関心であった某氏の句が
にわかに私の頭を駆けめぐると
になり、負けぬものかと作句に精
進したものであるが寂しい事に同
氏は、何思ったか川柳を去ってし
まい、私も川柳支部以外は全然出
席しないようになり、唯一つ残さ
れた新聞柳壇は私がやめてしまっ
たので、以後相見ゆることもない
が、柳歴も同程度であり、年令も
接近しておりよくぞ私をライバル
に選定してくれたと喜んだもので
ある。今同氏の句が川柳誌上にな
いのはこの上なく淋しく、それ故
に懐しくもう一度川柳に復帰して
くれないものかと絶えず望んでい
る。

ライバルとは よきものである

どの世界でも進歩発達向上の大
めには、ライバルの存在が大きな
役割をするが、決して泥仕合
や、蹴おとしをやってはならない。
相手をよく理解し、尊敬し、良い意
味で競争することは、相手を激励
し互に切磋琢磨の意態を盛りあげ
ることになり、その世界の進歩向
上に大きく貢献するものである。
ライバルとはよきものなり。

狸が憑いてる男

金井 文 秋

どの道に這入ってもライバルは
ある。またライバルを持つてこそ
上達もあり楽しみも増すものであ
る。先日阿倍野句会で、梅里氏に
好郎氏があり、十悟氏に堰子氏が

あり、文秋氏に一三夫氏があると
誰かが言って居られた。それ程一
三夫君と私は切っても切れない
ライバルでもあり親友でもある。
私を今日あらしめたのは一三夫君
を得たお蔭かもしれない。私と一
三夫君とは雑談に句会に大万川柳
に実にししの舌を削っているのだ
である。これは川柳だけの話で、一三
夫君のように博学多芸で、うそ、
標語、川柳、小話までやり、それ
で雑誌の編集を一手に引受けてい
るのだからたいしたものだ。よく
体が続くなと時々思う。大分前
の話らしいが、毎日午前四時五時
まで仕事をばりばりやるので、こ
れは人間業ではない、狸が付いて
いるのだ。しかも八匹も付いてい
る。このまま続けたら寿命を縮め
てしまうから、私が退散させてあ
げようと言う拝み屋さんがあった
そうだが、一三夫君の答が面白
い、同じ拝んで呉れるんやったら
狸をもう四匹ほど付けてくれ、
そんならもっと書けるようになる
やろうと言ったので、さすがの拝
み屋さんも開いた口がふさがらな
かったそうである。狸が嘘であつ
た証拠に、寿命の縮まった様子も
ない。こんな男を向うに回してい
るのだからシンドイ話である。も
し川柳一本で来られたらとても大
刀打ちは出来ないと思っている。

ライバルは外にもまだまだある。
誰々と言うものではなく柳人
全部だと言ってもよい。誰しもそ
れぞれ人の真似が出来ない良い所
をもっているのだ、それに戦いを
挑む事にしている、従って句会も
ペタランの多くの集る所を好んで
行くようにつとめている。川柳を
楽しんでる人の中には小集から
一歩も出て行こうとしない人があ
る、これでは井の中の蛙で中々上
達せず作れるようになった時分に
スランブに参ってしまふものである
と、こんな時にライバルがある
と、楽しみだけで無く一つは意地
が手伝うのにスランブも切り抜け
られるものなんです、句会で全
没が二三回続くともうこなくなくな
てしまふ人があります。句会は作
句の練習場でもあり、よい句を耳
から聞いて学ぶ所に意義があるの
です。

聞くだけの耳で脳へはつた
わらず 文 秋

ではなんにもならないのです。

ある野球ファンが試合も大分済
んだ時分にやって来て、双方の得
点を聞いたら〇対〇ですと言う返
事にああ間に合ってよかったと言
う笑話がありました。これなんぞ
は句会で抜けないから行かないと
言うのに似てはしませんか、ちょ
っと口が過ぎましたようですがお
許し下さい。中にはいくら全没が
続いても全出席掛道を行く人があ
ります、こんな人こそ上達が遅く
とも大成する人です。花火のよう
に華やかな人は花火のように消え
てしまふ人が多いのです。決して
悲感する事はないと思います。
その道に励もうとする人々は多
くのライバルを求めている。昔の
武芸者が武者修行に出かけたのも

130°の広角ルーフ型で、いままでの
ペンに比べ筆記角度が広く、英文で
も和文でも同じ調子で書けます。



世界で初めての

ルーフ型ペンの設計!

ルーフ型

ペンロックス スーパー

¥1,500

秋にひらく

(第2回)

短詩文学作品展

会場 大阪美術倶楽部(東区今橋二丁目堺筋西入)
(電話 九六二〇番)
会期 十一月八日(土) 九日(日) 十日(月) 三日間
—— 会員には別室で粗茶の用意もしてあります。
作品 短歌・俳句・詩・川柳作家新揮毫作品
—— 自午前十時 至午後六時
価額 売約に応じます。 会場係に御申出下さい。
(半折・横物・色紙・短冊其他)

主催 関西短詩文学連盟
後援 大阪市教育委員会
川柳雑誌社

剣のライバルを求めての事である
を思うと我々川柳人も大いに他流
試合も必要であると思っている。
今でこそこんな事を言っている。
れるが、私が川柳に手を染めた昭和
十一年頃、ライバルも柳友も一
人として居らなかった。いや作ら
なかったのだが、ふとした事から
川柳を知るようになり、古川柳に
ある穿ちやユーモアに少なからず
興味を感じ自分ではこんなものを作
って見たいと考えたのが動機で、
爾來六年間雑誌の投句のみ専心し
ていたのですが、戦争が進むに連
れて、時事吟の汨蓋を見るように
なつてから、すっかり嫌気がさし
ぶつくり川柳をやめてしまったの
ですが、それから十年再び川柳に
専心するようになってから、あの
時ライバルがあったなら十年も空
白がなかったらと思うと、ち
よっと惜しいような気がします。
それですら初心者も中堅諸君
も大いにライバルを作れと提唱し
てこの稿を閉じる事にしまし
う。

青風君の横顔

橘高薫風子

朝刊が来て寝しずまるお茶屋筋
(六月旬会)
学歴のある勝負師で線細く(八
月旬会)

明和支部の吉本青風君が六月に
次いで八月にも、不朽洞賞カップ
を獲得した。弱冠二十四才であ
る。青風君は、すでに昨秋の大阪
市民川柳大会にも天位賞を得てそ
の名を挙げた。

ここ一発のホームランバッター
である。川柳でも野球同様、ホー
ムランを狙ったとてたやすく打て
るものではない。実力と幸運とが
相俟って始めて可能となる。
相撲の世界でも相手の脇にかい
くぐり前傾を取って食い下れば、
屢々横綱大関を苦しめ、強豪を倒
すタイプの力士がいる。小柄と云
うどうにもならぬ欠点を補って、
そう云う力士は稽古と闘志で相撲

の極意と云われる忍を人一倍体得
している。

青風君はその様なタイプであ
る。兼席題には夫によく食い下
る。又、彼の熱心さは六月の旬会
に、退院後静養中の愛媛県今治市
近郊の郷里から、馳せつけた一事
からでも充分察しはつくが、旬集
「私達」の中、先ず二百句の暗記を
思い立ったのも彼なれば、私の所
有する路郎先生の句集「旅人」の
筆写を成し遂げたのも彼である。
柳歴ようやく一年半。明和支部切
つてのホープである。

★ わが喜びわが願い

沢田美喜

人生はよく「旅」にたとえられ
る。長い旅には喜びと同じえられ
る。悲しみもある。喜びだけ、悲しみ
だけというのは期間が短い、よ
ほど心算がかたよっている場合で
あろう。人生においてもバラの花
園を散歩しているような、快適な

時もあるかわりに「死の蔭の谷を
歩む」ような辛いこともある。人
生は平穩無事な時ばかりではな
い、程度の差こそあれ、苦しみと
喜びは、私達人生の行く手に待
ちかまえてあるものと考えてよ
い。

そこでバイブル等もち出して人
生を解決なさる方もあるでしょう
私は川柳をもち出すことにしよう
私。川柳の三つのスローガン、社
会批判、人生批判、人間陶冶、で
ある。人間の心の思いを此のもの
云える詩、「川柳」によってどれ
だけの人々が救われているであ
ろうか。

川柳について皆無であった私
は、風流人種だけが詠むものとし
か思っていなかった川柳が、私共
でさえ詠めること云うことに大い
な喜びを感じたものであった。
川柳の眼鏡をかけて自然と人間
関係の美しさや、みにくさを敏感
にうけとめ、心の思いをはき出す
ことの出来るのは一つの救いで
ある。

現代の若い人達は、ひばり、裕
次郎を知っている、川柳を説明
しても理解する人が少ないのは本
当に淋しい。私共川柳を愛した以
上、ひとりでも多くの人々に川柳
を理解するように努力したいと思
う。その為にも先輩の柳人はより
勉強してよき指導者となって戴
きたいのである。
思い出が川柳によって残されて
行く時、人生また楽しいのであ
る。喜びながら川柳を詠み人生
の旅を続けたい。

ノイローゼをふっとばす



習慣性や副作用の心配がない 催眠鎮痛剤

プロバリン

【健保適用】

30錠 60円 100錠 150円・医家用には粉末 25g

日本新薬株式会社

プロバリンはもちろん
催眠剤ですが、又一方
に於ては大脳皮質性の
緩和な鎮痛剤としても
大へん広い用途を持
っています。
例えば……最近話題の
トランキライザー的な
使用法もその一つ……
イライラ、ジリジリし
た時にいつも二三錠
これで気分も落着いて
夜も又安眠、という眠
あまりクヨクヨせず
今晩はプロバリン錠で
熟睡なさってください。



梶原景時、景季 (下)

富士野鞍馬

逆 船

「日本外史」に、
「文治元年（一一八五）二月、義経京師ヲ発シ、渡辺ニ戦ス。東兵ハ太戦ニ習ワズ、人人自ラ危ブメリ。梶原景時曰ク「諸フ逆船ヲ為ラン」ト。義経曰ク「何ヲカ逆船ト謂フ」ト。曰ク「軸艫皆船ヲ設ケ、進ムニ軸ヲ以テシ、退クニ艫ヲ以テス」ト。義経曰ク「進ムコトヲ求ムルモ退クハ兵の通患ナリ。乃チ退クコトヲ求メント欲スルカ」ト。曰ク「宜シク進ムベクシテ進ミ、宜シク退クベクシテ退クハ良将ナリ。進ムコトアリテ退クコトナキハ、野猪ニシテ介スル者ノミ」ト。義経色ヲ変ジテ曰ク「猪カ鹿カ吾ハ自ラ知ラズ。吾ハ唯ダ進ンデ敵ヲツクスノ快タルヲ知ルノミ。公ガ若シ大将トナラバ、逆船千百、公ノ為ス所ニ聴サン。義経如キハ則チ欲セザ

ルナリ」ト。衆、景時ヲ目笑ス。景時慚恵セリ。」
とあり、これが有名な「逆船」のことであるが、これ以来景時は一層義経との感情が悪化し、鎌倉の頼朝へ義経の行動を悪く報告したのであった。

逆船から梶が曲つて譏す也

(タル八九)

逆船の意趣でぬれ衣を着せ申し

(九九〇)

逆船よりでごとをおもにざんをする

(九九六)

逆船からだん／＼梶が曲り出し

(一一二五)

と逆船を詠み、

梶原は耳を出しなの元祖也

(拾五)

鎌倉ではなはだわるい梶を取り

(万安九)

飛車のきくように梶原工夫する

(タル七五)

豆を煮る壳を梶原焚きつける

(一一〇八)

時平は文景時は武を譏し

(四三三)

菅原と梶原文と武を譏し

(一一〇二)

とその譏言を詠んでいる。

ゲジゲジ

梶原父子は、義経を譏した
というので、後世の人々に憎まれて、その紋所の矢筈二枚
梶の葉がゲジゲジに似てるから、いやがられる虫のゲジ
ゲジと仇名をつけられて、川
柳になっている。

罷り出たるものは梶原で雨

(タル一〇八、一六五)

げじ／＼で日和の替る星月夜

(一一三五)

梶原を窓へ追ひ出す虎が雨

(一一三三)

ゲジゲジが出ると雨が降ると
いう。

お狩場の雨ゲジ／＼が出て日

(タル一四六)

和
げじ／＼と百足に困る蝶千鳥

(八八六)

御夜話に梶原が出て大さわぎ

(二二四)

曾我になる前表背に梶原

(二二五)

これらは曾我兄弟の仇討に附
会して詠まれている。

梶原が出て源氏名の坐が崩れ

(タル七〇)

大奥の女中等はゲジゲジに声
をあげて驚く。

げじ／＼は二疋ならんだやう
な紋

(タル二)

は梶原の紋である。

げじ／＼の毒に義経あてられ

(タル四四)

兄弟の腹をそこねるゲジの毒

(一一一四)

正に義経はゲジゲジの毒にあ
てられたといえよう。その含
み状にも梶原父子の首を供え
てくれと書いている。

こうして憎まれた梶原は、

梶原が舁にはどくを書ちらし

(タル二、拾六)

梶原と火鉢の灰へ書いて見せ

(タル二)

等と詠まれ、それでも生田の
森で歌を詠んでいるので、

梶原が歌をよむのは疵に玉

(タル五一)

梶原は歌をよむのがめづけも

(二三〇)

の
梶原は心の外の歌人なり

(九)

などといやかされている。

犬坊へへしに梶原けしかける

(タル十九)

曾我五郎は助命されるところ
であったが、祐経の子犬坊丸
の申出で斬られたのであつ

川 雑 不 朽 洞 会 員 の シ ン ボ ル 美しいバッジが出来ました

スマートなデザインは、キツトお気に召すものと自負しております。

(1個200円・送料8円)

申込所

大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地

川 柳 雑 誌 社

(振替口座大阪 75050番)

絵馬屋

た。それも梶原がケシかけた
だろうと川柳子はうがってい
る。

頼朝が、浅草寺を修繕した
時、その奉行として梶原景季
は、浅草茅町日高屋治郎左衛
門の家に滞在していたと伝え
られ、その日高屋は浅草見附
の門番で、絵馬を売っていた

ので、次のような川柳がある。

観音の次はおれだと絵馬屋い

い (タル七二)

梶原は絵馬屋がうちが旅宿な

り (三三五)

梶様の御詠へと絵馬屋いひ

(二三三)

げじ／＼を絵馬屋決して殺さ
せず (七七八)

ここでもゲジゲジが詠まれて
いる。

最後

梶原父子は、頼朝に重用されていたが、頼朝の歿後は、諸將に睨まれ、景時は、將軍魔立の隠謀ありとして小山朝光を頼家に讒したが、却って三浦、千葉、畠山以下の連署排斥を蒙り、正治元年(一一九九)鎌倉を追放された。それで、子息、郎党を引連れ、相模の一の宮に城廓を構えてみたが、反幕興兵の目的をもって京都へ赴く途中、駿河の清見園で豪族芦原小次郎外の駿河武士団に襲撃され、狐崎に転戦して、遂に梶原父子一行は全滅したのであった。時は正治二年(一二〇〇)一月二十日、景季三十九歳であった。

其処を梶原山といい、草薙の東にあたり、麓に梶原堂がある。一族の墓は、高橋高源寺にあるときいている。

川柳歳時記 (3)

水谷竹莊

秋の巻 (二)

菊と料理

夜店の灯菊色々に照しけり 竹莊

気品の高い植物四種類をえらんで、昔から四君子と呼んでいる、だれがきめたか知らないが、梅、菊、蘭、竹、のことで、生花としてよく、絵に描いてもおちついた上品な植物ばかりである、したがってお目出度い席の料理にも色々な形に使われている。

その中でも秋の料理に使われる菊について色々書いて見ましよう。

料理というものはいずれの国でも古い伝統に根ざしていて、いわば民族の体臭のようなものである、日本料理を伝統的に調べてみると、家庭に伝えられる山家料

ある。一族の墓は、高橋高源寺にあるときいている。

理、茶家に伝わる懷石料理、禪寺に伝わる普茶料理、都会中心に発達した料亭料理などに区分することが出来る、またこれを地理的にみると関東風、関西風に大別することが出来るし、長崎地方から流行をみたらしく料理なども特異性がある、しかし現在では互に長所も学びとって渾然とした日本料理にまとまりつつあるのではあるまいかと思う。

また日本料理の特徴は何んであるかというと、中国と比較してみると一番よくわかることである、中国は大陸であって鮮魚の輸送が不便なこと、また水質が悪く清水に乏しいこと、昔から戦乱に悩まれたことなどが原因して、いきおい保存食料(乾物食料)の発達となり、日本の四季折々の情趣にとんだ料理の材料をたのしむなどという余裕が無いのである、このことを思うとわが国は材料の点で

も非常に恵まれていて、初鰹をたのしんだり若鮎の味風を喫したり、松茸の香りを賞したりして常に旬(しゅん)の料理を追いつ、迎えて楽しむのである、その四季のうちで一番、食欲の多い、何をたべても、うまいのは秋である、その秋の味覚の一つとして風流人に喜ばれるのが料理菊である。

市松模様の油障子を日除けにして、金銀の等級票を誇らかにつけた展示会場の晴がましい菊もあれば、山路に人知れず咲き乱れている野菊もある。

菊植えていても社長は俗に生き 路郎

日本の菊の歴史はかなり古いもので、仁徳帝のころに百濟から伝ったものといわれ、その源はやはり支那大陸にあつて大古時代からすでに栽培されていたという記録がある。五節句の一つである重陽の節句は菊の節句ともいい、菊の酒を飲む故実は、仁明天皇の世に始つたといわれている。觀賞用の菊がますます隆盛になる一方、垣根仕立てや畑の片隅に咲いた小菊の花が食用にして香りもよく一般の嗜好にあつるところから、食用菊として広く栽培されるようになった、これは甘菊といって、苦味がなく俗に料理菊といわれる種類で

ある。

料理菊には黄白、二種類あり、黄菊の方が色もあせず菊海苔として、保存もきくし、市場の需要も多いので、多く栽培されている。菊の香がまだ手に残る花

鉢

竹莊

菊花を摘んでザルに入れたままさつと熱湯にくぐらせ、水にさらし、よく水分を絞ってから甘酢、三杯酢、酢じょう油などでたべるまた吸物碗にうかしてもよく、刺身のツマに添えることも結構である。料理菊以外の菊もたべられるが、苦味があるから、ゆでる時に少量の重そう、又は酢を入ると苦味が除かれる、赤色の花は色が変りやすく、料理にはあまり感心しない、菊の葉は何菊によらず、天ぷらに揚げて緑の色どりに使われる。

菊科の植物は食用になるものが非常に多くただ今出廻っている菊菜(しゅん菊)も菊の一種で、香氣も強く、浸し物、こまあへ、煮物などにする。また、河豚なべや、鯛ちりにはぜひほしい季節の野菜である。

糸造り菊の葉つけて花に見せ

菊の葉を添えた手料理はめられる 竹莊

(つづく)

三味線と川柳

山川阿茶

どうも日本人は三味線が好きで国民らしい、三味線と離れられない宿命をもっているように思う。

帰化しても唄は二上り三下り
草一郎

ほんとにそうだろうと思う。

妾腹に生れて三味の音が
潮花

好き

妾腹の子でなくとも好きしやないかしら。ジャズだロカビリーだと騒いでおる連中でも十年もたつて社会に出れば宴会用の小唄の一つも習って三味の音としたしむようになるであらう。

三味線は明の時代に明から沖繩へ、沖繩から足利の末期永祿五年に、堺へ入って来たものだといっているから、もう四百年からのお馴染で縁も深いわけである。初めは今も沖繩に残っている蛇皮線であつたのだから次々と改良されて今のようになったものと思われ

る。
三味線はむづかしいと云う、成程ピアノなら調律師が音を整備してくれてあるから「ド」の鍵を叩

けば誰れが叩いても「ド」の音が出るが、三味線は基本の調子を押さえる所。所謂「つば」も自分の勘で自分の耳で判断してゆかねばならない、一応掉の接ぎ目が大体の「つば」になっているものの、その間に細かい「つば」があつて

「つば」がきつちりしていても、基本の調子に狂いがあつては正規の音が出ない、調子があつていても「つば」がはずれていると「どつば」で音がまちがって来る。

どつばでもよい惚れた妓の合三味線
阿茶

これですむ場合とすまぬ場合がある。弟子を相当もっている師匠でも調子の定まらぬ人や「どつば」へはまりどうしと云うのがある、比較的ルーズな小唄の師匠に多い。

上等の三味線もって二が下り
阿茶

これは耳が悪いので練習によつて或る程度までは、矯正されるが、或る人は一の糸の音、或る人は二の糸の音に弱く判断出来ない、音

の判断の正確でない人を音痴と云う。だから音痴と云つても全部の音でなく、一部分ずつの音痴があるわけで、或る音波を感受する部分の働きが正確でないと云う事になる。

うっかりと音痴の三味線引き受ける
阿茶

こんな事になると不馴れの者は大困り。

川柳に出て来るのは大抵二上りか三下りだが、本調子、三上り、六上り、一上り、六下り等の調子があつて、本調子が基準で、二が上れば二上り、三が下れば三下り、三が今一つ下れば六下り、本調子から三が上れば三上り、もう一つあげると六上り、本調子の一が上ると一上りになる。一上りなど間違ひじやないかと思われるかもしれない。

六上りで最近出来た「よろめき」三上りのは唄を一寸失念。

一上りの唄に「縁がありやこそふとした事で苦勞しもするさせもする、色の世界じやによつて苦の世界」と云うのがある。

本調子とは二上りでも三下りでもずっと低い調子で、この場合忍胸を用いる場合もある。忍胸とは次の低い長い胸の事ではあるが、句の中だとひそやかに三味線をひいてる事に

下座敷誰れに遠慮の忍胸

忍胸隣りの湯槽できいており
阿茶

おやすくない光景である。

何本の調子と云う事は調子笛があつて、これで一の糸か二の糸の基準をきめて低い方から一本二本と高くなつてゆく。だから三本の調子もあれば二上りもあるわけである。八本位で唄つた昔がなつかしい。

一本を師匠にねぎる舞台裏
阿茶

「お師匠はん一本まけとくなはれ、声出しまへんが」と云う会話もきかれるわけである。

「高切れ」と云う言葉も出て来るが、腰のあたる処は切れても高い処で糸の切れる事は珍しいので、殊に二の高切れは何かいい事があるとか色街など落籍されるとか且

那が来るとか云う。

高切れへ鼠啼きしてなぶりあい
阿茶

曲弾きと云うのがあつて、三味線を放りきつて、ばアと受けとめ次を弾くのを、二人羽織で左手と右手が別々の人で三味線を弾く。又一本の糸で春雨を弾いていた万才もあつた。

糸廻しと云うのもあつて、一の糸を弾く人は一の糸ばかり、二の糸をひく人、三の糸を弾く人と最少は三人、何人でもよし、三組に分れて一つの曲を弾いてゆく、地唄の越後獅子等よく使われる曲で、手事になって来るとテンポが早く、ややこしくなつてうっかり二の糸をひく人が三の糸まで弾いてしまひそうになったりして、見ても仲々面白い。いつか十五人はどの検校さんたちでやられたが、

麻生 葎乃 著・米田三男之介装幀

福壽草

定価二百五十円
送費 三十円
菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金宇塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社

郵務口座大阪七五〇五〇番 電話住吉(四)六〇八一

泥 集

選 乃 菟 生 麻

課 題「地 獄」

いかにもうれしそうに楽しんで弾いてる人平気な人、分別くさい顔をしてる人、一生懸命の人など、一人一人個性が出ていて面白かった。

糸廻しジャンケンボンで
一をとり
阿 茶
三味線は原則として撥で弾くが小唄は爪弾きである「迂り撥」は撥が亡って一本でよい処を二本も三

本もひく事で「かくし撥」とは指の間に小さな撥をはさんで弾く事「入れ撥」は雇仲居の三味線のようににぎやかに一つでよいのを二つ弾いたり余分の撥を入れる事であまり上品ではない。

三味線の胴の皮は猫がよく薄くて音色はよいが弱い、犬は丈夫な代りに音がおちる。

掉は桜、櫻、花林、紅木（白紅）

夫 唱 婦 随 婦 唱 夫 随 て 不 足 な し (路 郎)

忙しい商売のかたわら、本社句会や友の会の会合には、ほとんど出席されている熱心な女流作家に吉川悦子さんがいる。よっぽどご夫君に理解があるようで、ご満のほどが察せられ、おうらやましいことである。

本社句会出席の熱心組といえ、去年は一回欠、本年は無欠席

という川島葉乙女さんが筆頭だが、若い人たちに交って、いつも淑やかに、句箋と取組んでいる杉村知恵さんの姿が目をはひく。六月にカゼひきで欠席されるまでは、全出席なるかと句会部でも注目していた人であった。

天

争いの地獄は生きている限り 玉枝

地

地獄より逃れ彼岸へなお遠く 奈良子

人

針の山弱い男と手をつなぎ きさ子

五 客

火を消して十六日の鬼おどり きさ子

薬一本つかむ処の無い地獄 銀子

灼熱の邪恋地獄へ共に落ち 明美

サンボスタイル 地獄の鬼に似ておかし 美舟

地獄でも鬼に警棒もたせる気 阿茶

平 拔

地獄の沙汰を金で済まして湯につかり 俊江
アブレには閻魔様でも歯がたらず 阿茶
坊さんにきいた地獄の夢を見る 美舟
地獄だよ君その腹を立てるのが 若芽
針の山でも一緒ならばとほれている 小石
一瞬に火の海となり生地獄 明美
地下鉄のラッシュ地獄の様に詰め 春栄
試胆会ここは地獄の一丁目 メ女
悪業がリストにのっている地獄 葉乙女
地獄迄親不孝して二人ゆく 花鶴美
地獄からも極楽からもかぶる 風の子
拝観は手も触れさせぬ地獄の凶 知恵
合いたさは地獄へ行った人を追い 初穂
病む身には今が地獄に思われて 雅佐女
地獄極楽信じて母はまだ達者 文女

木もあるで作るが紅木が上等とされ夜更けてからの遠音がちがうと云う。三味線もいいのは銘が入っていて数十万円もする。

更けた夜に二人できいて 紅木掉

★ 阿茶

忙しう商売のかたわら、本社句会や友の会の会合には、ほとんど出席されている熱心な女流作家に吉川悦子さんがいる。よっぽどご夫君に理解があるようで、ご満のほどが察せられ、おうらやましいことである。

本社句会出席の熱心組といえ、去年は一回欠、本年は無欠席

地獄の金もうけ 悦子

雑誌が出るとまず近作柳樽をひらいて女流作家の成績を見るのが楽しみだという潮花氏。菟乃先生の片腕として実によくはたらく人である。なかなか出来ないことに、たまさかの日曜日には、病院へ入院している人たちの見舞等に走り、夜はおそくまでいろいろ作句等の返事を書くという、路郎先生の言われるとおり正に手八丁足八丁の人である。

(F)

事 務 用 品 専 門 店

事務用・文具・器機・什器

株式会社

心 齊 橋 ク ニ ヤ

本店 心 齊 橋 北 詰

電 (25) 4740-1

阪神店 阪神百貨店五階

電 (36) 1201



路

集

ミシン

小西無鬼選

小姑がミシンを遠慮なく使い 白湊子
お隣りへ届かぬ音でミシン踏み 白帆
ミシン糸中途で一寸すねてみせ 祥月
一台のミシンで後家と意見が食い 隆夫
内職のミシンへ亭主灯を下げる 初甫
弟が使うたか調子の出ぬミシン 葉光
うれしい日ミシンさくさくはすむ音 すみ江
嫁く時に持たせたミシンまで 呑まれ 静観堂
内職のミシン背中の子もあやし 奈良子
見合した噂へ違わずミシン来る 一進
新米の針子とミシンもう見抜き 実男
うちのはシンガーやでと言っておき 一休
子の頭撫でてミシンを叱つとき 木魚
嫂のミシンでドレメへ通い出し 敏子
新しいミシン油を差したが 芳仙
酔った時だけミシンは買つてやる 同

内職のミシンと変る不倖 晃康
お小言をミシンの音で消してやり 夜潮
折れたのは父の方なりミシン買う みのる
娘は嫁ぎミシンの月賦まだ残り 進之助
糧を得る母のミシンの乱れ髪 一鶴
ミシン踏む妻にすまない盗み酒 清人
不器用な妻のミシンを着られる 鳴桃
ミシン踏むさくさくも間借の遠慮がち 恒雄
お隣りのマージャンうらはミシンの夜が更ける たけお
借りミシンの気兼ねを父に訴える 三四郎
父無し子と言われぬ無ミシン踏む 狂二
いい日那出来てミシンに錆がうき 幽谷
おばあさんの代のミシンをまだ使ひ 陽子
二階借りミシンも貸してもらふ仲 淀月
内職にミシンの腕が買つて出る 智津子
ふとミシン手先がにぶる物想ひ 銀子
その時はミシンで稼げさ縁に付け 南牛子
もう一月で自分の物になるミシン 藤波

ミシン踏む音すさまじい低気圧 寿栄
泣き声を聞き分けながら踏むミシン 宗太郎
救急車寝た子へミシン振り返り 光郎
内職のミシンとなつて夢が消え 井蛙
子に夢を託してミシン踏み続け 岳詩
貧ミシンお世辞の長いのに困り 半休
セールスマン自然に縫えるようにいい 庸佑
フアツション横にミシンが涉らず 牧人
残業を帰ればミシンも夜業中 蜻蛉
嫁くミシン大きなのが目に残り 義夫
人形のオペベにミシン横取られ 恵二朗
形通りミシンだけはと数のうち よし子
母の日の美談ミシンと写される 三林坊
熟練はミシンのような針目なり 万女
ミシン一台嫁く妹に無心され 東岸
三代に仕えるミシン塗りを剝げ 三舟
たまに踏むミシン税吏に見積られ 代仕男
ミシン踏む部屋のカンチンあせており 愛鳩
御自慢のミシンでこんなものばかり 春雄
終電へヒステリックに踏むミシン 肇
洗濯機がミシンかボーナス岐路に立ち 蘭
ミシン今は荷台となつて倦怠期 むじな
結局はミシンのできる嫁をとり 雄々
バス待ては月賦ミシンが話しかけ 雄声
競売へ自分のミシン買いに行く 旭峯

ミシンさへあればと言うたのを忘れ 圭井堂
母となるミシンは嬉しドレミファソ 伊津志
ミシン台残し頭を質に入れ 句念坊
ミシンもうお仕舞と言う音になり 不二
押し売りをミシンの音が追いかさす 狂風
宿題は親がしてやるミシンかけ 吉枝
引揚げて一家ささえるミシン踏む 慈雨
内職をさす気度夫の買うミシン 七面山
継ぎあてただけのミシンを飾るとき 保美
佳
夜業するミシンに馴れて虫が鳴き 葉光
何処が天下取ろうと踏むミシン 豊年
内職のミシンへ小さな鏡餅 舟遊
尺貫法とセンチミシンで取囲み 保夫
ミシン踏むこのデザインを着て見たし 華甫

大坂本舗

丹月堂

電中セニセニ

色紙短冊
書画用品

胎動へミシン踏む足ふとにぶり 美音子
ランドセル待たしたミシンのあわてよう 白 李

人

倅せなミシンあなたのものばかり 恵二朗

地

ミシнта晩のおかずを考える 十九平

天

溜息をそつとミシンに縫い込める 昌 男

旧 家

八 木 摩 天 郎 選

抵当になつて旧家壁も落ち 白溪子
御旧家の仏閣へ分家また呼ばれ 保 美
金の要る話へ旧家そつぽ 向き 白 帆
部落名を苗字に旧家まだ 栄え 蜻 蛉
過去帖へ旧家は同じ名がつづき 牧 人
大庇白髪翁のほかは留守 静観堂
提灯の色も歴史のある旧家 すみ江
旧家とは名のみ井戸堀だけ残り 豊 年
すすけた旧家に誇る 鯉 櫃 一 休
シツクイの白さも旧家らしい屋根 舟 遊
銀行の社宅になつた旧家なり 木 魚
祖脈な旧家の系図の中の俺 芳 仙
三代目落目旧家と言うとれず 義 夫
娘の自慢実家は風土記に載つてゐる 進之助

ロケ隊がやって来そうな塀つづき 同
殿様のカゴが止つたらしい軒 一 進

大学で旧家のボンチ赤になり みのる

その実は旧家苦しい暮らし向き 一 鶴

御寮はん火は昔のままに生き 一 傘

紋付の木綿の夜具にねかされる 鳴 恍

相統の遺産へ旧家もみつづけ 恒 雄

グレン隊旧家生れの子も交り たけお

旧家から家風に合わね嫁が来る 秀 三

御先祖は賤ヶ嶽にて死んだ家 定 月

計理士を国定資産で訪う旧家 三四郎

家柄を楯に結婚許されず 狂 二

お位牌の数が旧家を物語り 幽 谷

女学校を出ている旧家のお年寄 陽 子

旧家の出どこかおつとりした御人 悦 子

旧家から時勢の波を聞いて来る 保 夫

旧家だけに大きな刀も有る話 銀 子

母家まで貸して旧家のつづきとく 愛 鳩

伝説になるほど旧家くすれかけ 南 牛 子

丁髷が出そう旧家の門構え 光 郎

名園になごりをとどむ旧家あと 悟 朗

墓石もう読めぬ先祖へ遠く生き 恵二朗

市場籠旧家の奥さん来て値切り 虹 要

わが里は旧家と妻が自慢する 岳 詩

相伝の槍がなげしで煤をため 井 蛙

由緒ある系図が悪の邪魔になり 宗太郎

泊り込み旧家の系図よむ文士 葉 光

それとなく知れる旧家の娘の育ち 隆 文

ハイキング旧家の水で昼にする 初 甫

旧家から貰う話に嫁く話 祥 月

構えだけ誇る旧家の火の車 寿 栄

旧家跡維持費に困る保存会 藤 波

掛軸で旧家も派手な暮らしぶり 春 雄

薄暗い庭に茶室も有る旧家 代仕男

目に立たぬものから旧家売り始め 東 岸

子の代になつて洋間にした旧家 九呂平

由緒ある旧家と知れる冠木門 十 七

格式があつて旧家と言う名残り 伸 生

旧家もう売るものもなく土蔵をうり 雄 声

演劇へ旧家の衣装借り出され 美音子

旧家とは名ばかり実はおんぼろ家 新 石

本陣というた旧家へ燕の巣 華 甫

鬼瓦欠けて落目と知る旧家 雄 々

弥生式土器が旧家の庭にあり 慈 雨

櫻くも旧家高利貸に乗っ取られ 圭 井 堂

ロケ隊が来てから旧家意識され 圭 木

嫁ぎ先旧家で若い後家のまま 狂 風

文化財委員旧家をまた訪ね 十九平

四書五経備えてうちは旧家です 七面山

佳

公報の其の後の旧家茶を教え 三四郎

旧家だがちとかぶりふる鬼瓦 夜 潮

おはんのなげきはこいさん赤い爪 さんたく

ニコヨンに清和源氏も混つてい 三林坊

旧家もう数の揃わね器もの 法泉子

人

全盛を偲ぶ旧家の倉の中 庸 佑

地

旧家からほくほくと出る骨董屋 芳 仙

天

バスガイド旧家を歌で振り向かせ 不二

軸

白足袋の黒うなるのも旧家らし 摩天郎

品質優良

洗 筆 器



TACHIKAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

大坂市東区富野町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

柳界展望



バーリ近代美術館前で

在バーリ 池田正三画伯

句会

▼本社十月句会は七日

(火)午後六時から下

寺町二丁目

市バス停前、光明寺で開催される。広々とした寺院の庭にすく

虫の音の伴奏で作句する醍醐味は

川柳作家の特権です。柳友を誘い

合わせ出席されたい。▼南区医師

会文化部杏林川柳会(大阪市)句

会は九月十六日午後七時半から南

区三休橋南詰中島小児科診療所楼

上で開催。▼大阪通信病院川柳会

は九月廿七日午後二時から五階会

議室で開催。▼南海電鉄川柳句会

(大阪市)は九月廿五日六時半から

親和倶楽部で開催。▼コクヨ

川柳会創立句会は八月二十二日

(金)午後五時半から黒田国光堂

で開催され、九月句会は九月十九

日午後五時半から同所で開催。以

上路郎主幹出席。▼川維倉敷支部

(倉敷市)句会は九月十四日(日)

榎原一善居で開催。▼川維下関支

部(下関市)句会は九月十四日下

関駅会議室で開催。▼竹原川柳会

(広島県)主催、第一回近県川柳

大会は九月十四日(日)竹原小学

校二階大講堂で開催、出席者百二

十余名投句者五十余名の参加で極

めて盛会であった。▼川維婦人友

会の有志観月句会は九月二十八

日(日)午後六時から諏訪の森の

中島小石さんのお宅で催される

と。▼川維篠山支部(兵庫県)で

川柳婦人会グループが岡沢凡志氏

の肝煎りで満足した。▼川維高知

支部句会は八月十九日川竹松風居

で開催。▼川維備前支部(岡山

県)句会は八月二十三日夜浜田久

米雄居で開催。▼川維鳥取支部句

会は九月六日いりち画房で開催。

▼川維岡山支部句会は九月二十日

(土)岡山鉄道第五寮広間で開

催。▼第七回山口県下川柳大会は

八月二十四日山口市で開催。川維

下関支部の岡藤四郎、中村九呂平

氏等が活躍された。▼第七回東北

川柳大会(仙台市)は十月十二日

(日)午前十時から仙台商工会議

所で開催。▼全国鉄川柳人連盟主

催、第二回全国川柳大会は九月六

日、七日熱海職員集会所で開催。

松川杜氏氏が選者として出席され

た。▼故大野琴莊句集「富士筑

波」出版記念句会は川柳長屋連の

主催で十月四日(土)午後一時墨

田区向島須崎町須崎会館で開催。

会費百円。宿題筋書・両手・富士

山。

柳誌創刊・再刊

▼「川柳にちりん」が七月福島市

の川柳日輪社から創刊された。B

列5号。▼「川柳飯坂」が八月十

日、福島県飯坂温泉川柳会の吉田

筆人氏によって再刊された。

句集

▼「国鉄川柳句集」が九月一日に

東京都大田区本蒲田三ノ十三国

鉄・蒲田駅内の全国鉄川柳人連盟

から刊行された。定価五百十円。

消息

▼三輪峯田氏(ホノルル市)は九

月三日飛行機で五十二年振りの浦

島訪日の途につかれた。郷里山口

市で約一年近く滞在される予定。

▼戸倉普天氏(兵庫県)は九月十

一日お孫さんの顔を見に仙台へ。

序でに芭蕉の史跡、作並の岩風

呂、金華山からの捕鯨のさま、南

部富士、啄木の故郷、十和田湖周

遊、と次々にみちのくの名所を訪

ねられた。▼中島生々庵氏(大阪

市)は八月三十一日三越劇場で花

柳流ゆかた修練会で「一の谷」

「こうもり」に出演された。▼速

水真珠洞氏(福岡市)は九月二日

熊本県の湯の児温泉に遊ばれた。

歸びた三味の音に浮世も忘れ川柳

も忘れ自分をも忘れかけた。又

鹿児島市の南、指宿温泉からは名

物砂湯の砂の中にもれて心よい

限りとの書信を寄せられた。▼木

村千容氏(倉敷市)は六月二十七

日熱発、中央病院へ半月入院。目

下自宅静養中の由。▼竹内千里氏

(大阪市)は九月一日からハイボ

ールスタンド「ひとみ」を千日前

大劇場北横東入に開店された。▼平

沢保美氏(大阪府)は八月二十五

日約二年の療養所生活にピリオド

をうたれ、十月復職まで郷里の長

野県で静養されると。▼小島さき

す氏(大阪市)は八月初旬千石荘

を訪問されたところ柳叟氏は退院

していいれちがいになり残念で

した。梵鐘さんはお元気で何より

でした。なんとか体温川柳会を立



コクヨ
便箋

て直そうとこつこつと各病棟を廻
って新らしい柳友を作っておら
れましたとの由。▼正本水客(大
阪市)黒川紫香(豊中市)の両氏
は竹原川柳会主催、第一回近県川
柳大会から招かれ九月十三日の夜
行で出発、翌十四日の大会に臨ま
れた。▼川維名古屋支部(名古屋
市)は九月役員を改選支部長に佐
藤千代春氏、副支部長に藤沢不
二郎氏、支部句報の編集担当に、
神原文鳥氏が就任された。▼八木
摩太郎氏(堺市)は九月十六日富
田林市婦人会主催、文芸教室第一
回開講川柳の部を担当され、富田
林市公民館で婦人のために川柳を

不朽洞の人々



十国峠にて
(河村瑞川医博夫妻)

昨年一月三日生々庵夫妻と熱海で遇い、生々庵の宿で一泊して家内と十国峠から箱根へ遊んだ。若い時からワンマンで家内にも苦勞をかけたが年は争われず次第に本来のよい事主にかえりかくは妻を帯同しての旅行!! 家内の喜ぶこと、写真の通り、世の中一番よいもの、有難いものは家内であると還歴を過ぎて始めて悟りが開けた次第。

(瑞川)

不朽洞会員ならたても結構です。われとおもはんものは終らしいものを返してください。

一國快馬

説かれた。▼米沢曉明氏(大洲市)は八月十八日から三日間放送教育研修会で小豆島に出張され、「小豆島期待違わぬ景にふれ」の句信を寄せられた。▼西いわを氏(大阪市)は八月十九日箱根を経て熱海へ、「箱根越す峠は霧に包まれて」の句信を寄せられた。

シシヨ祭の当日受賞された。転居
▼川端柳風氏(東京都)は渋谷区幡ヶ谷本町二ノ二〇一諏訪方に転居された。▼神谷凡九郎氏(大阪市)は港区弁天町三丁目一九に転居された。

住所改称

▼正木水客氏(大阪市)の住所が改称された。
大阪市東住吉区湯里町二丁目二五
▼臼井三林坊氏(玉島市)の住所は岡山県岡山局区内玉島市陶
改号
▼山岡一歩氏(西宮市)は麻生一歩氏とまぎらわしいので半歩と改号された。「先輩より半歩さがって我坐る」(蕉)

不朽洞
★常任理事會
八月は休会。
★常任理事會
九月廿七日
(土)午後七時南区三休橋南詰中島小児科診療所楼上で開催。大阪市民文化祭川柳大会の件、川柳不朽洞会総会の件其他。

★新会員紹介

八月

▼本山遠二氏(笠岡市)正会員

九月
▼中谷ハナ子氏(大阪市)正会員

方正氏推薦

★飛・燕・往・来

一善氏推薦

★築山快夢起

(ホノルル市)より
一龍郎氏

私共兩人滞米四カ月の旅を終り

去る二日元氣で戻って来ました。早速御通信申上るのでしたが、帰って見ると之までの拙宅が同地内の俣の宅と交換済(出発前の相談で)家財の大部が小さい家へ移った丈なので自分その整理片付に、店の方は人手薄の故を以て召集、四日から仕事、宅のヤードは近來になり暑中の長雨で植木も草ものび放題と云う仕事が山積なので、どちらへも御挨拶も出来ない始末、御無礼の段平にお救し下さい。

日本に共に質量

サイクリングは シマノの
3段変速装置で...
どんな山道も楽々と一飛びノ

シマノの 最優秀を誇る
3.3.3.
自転車部品
フリーホイール
ハブ・スポーク
333
野村 島野工業株式会社

之までの三分の一位の小屋ですが二人住いの隠居家にはこの方が手がからなくて便利、色々な家具が整って入ると小ぢんまりした好適の家でホムムーンカデーなどと称して悦に入って居ります。(以下略)

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

社 川柳忌句会 (大阪市)

9月7日 午後6時

会場 光明寺

九月に入ってから連日三十三、四度を上下する暑さで、盛夏がブリ返したようである。四年連続の豊作が約束されているようではあるが、あなたの句の収穫のほうはどうでしょうか。

開会二、三時間前、お眺え向きの雨もあり、秋をよぶ爽やかな風に肌を洗う。

戸田古方氏の句評から、きょうの初代川柳忌句会のページをひらく。

「ま」ということの重大さを、九月月の川柳塔から、豆秋氏(3句目) 梅志氏(1句目)を例に、句の区切かたについて語られた。上五、中七、下五と三段に読まず句、上五、下十二と読まず句、それらの中の「ま」によって、句の躍動する点を持ち時間一っぱいの熱弁に会場の耳が一つになる。

第二ページは、久しぶりに路郎主幹が登壇される。まず川柳忌に際して、初代川柳の句が巷間にあまりすくないことを

指摘され、東京の川柳家もつと力を入れてくれたら、あるいはどこかに初代の句が埋まっているのではないかと川柳人らしい熱情をブチまけられた。

川柳忌に際し本年から川柳忌句会の席上で席題選者を推せん発表することになった。

まず、柳歴三十年の岸和田川柳界のリーダー格である高橋操子さん。二十年の柳歴をもつ金井文秋氏。柳歴は浅いが熱と努力の人菊田いきむ氏の三氏が、恩師によって、それぞれ紹介された。川柳選者陣に推せんされた三氏の、決意にもえる紅潮した面もちは、さすがにうれしそうであった。三氏よ、この光栄を披露壇上において、よく恩師に応えられんことを――

九月の会の不朽酒杯は中島生々庵氏がにぎられ、ベテラン陣営の健在ぶりをここに示されたわけである。

九時、川柳忌句会のページを閉じる。

(F)

出席者――路郎・生々庵・葉乙女・知恵・満潮・十悟・一三夫・水客・芳平・文蝶・梅志・句念坊・連・栗・阿茶・茶仏・水堂・鶴汀・淡舟・舟遊・す・む・薫風子・三司・高史・圭井堂・増美・一瓢・葉光・正一・狂二・豆秋・蘭・井平・いさむ・永断・凡茶・文秋・雄声・武助・六童子・求女・多久志・浪速子・晃・青風・柳宏子・伸生・梅里・南宗・義弘・麦稻子・与呂志・悦子・紫香・摩天郎・牧人・清人・旅風・笑司・博也・恒

明・善風・進之助・新石・堰子・古方・静馬・操子・きさ子・庸佑・いわを・潮花・利武・繁雄・悟郎・宏子・葎乃

兼題「世間」 麻生路郎選

かたくなな性へ世間も遠ざかり 失名
小金貯めて世間は怖いものぞ知り 牧人
老いらくの恋へ世間は味方をし 罔男
一も二も世間世間で踏み切れず 寿栄
恩給で暮し世間に疎くなり 越舟
眼帯がとれて世間がまた戻り きさ子
世間いまメートル法でまごつかせ 操子
無軌道な世間が母の腑に落ちず 茶仏
炭を焼き世間にうとい人となり 雨佑
世間懲言えばドライの娘が笑い 武助
世間様へ犯人の母泣きつづれ 博也
世間への気兼ね後添貫らわん気 笑司
功成りて世間の恩義忘れざる 静馬
食て行くだけの世間に疲れきり 夢路
同病もあつて世間が広くなり 知恵
世間から相手にされぬ子で愛し 雨佑
世間なれしてふんふんと聞き上手 進之助
そのけつべきさが世間よりはなれ 宏子
両党首世間話をして別れ 岳詩
婚約の水さへ世間がうるさすぎ 陽子
しぶちんも言う事だけは世間並 雄峯
世間でいばかり気にするザマス氏 新石
世間の目かももう居れぬ紅をさき 豆秋
先生といわれ世間にうとく住み 浪速子
自殺してから世間が騒ぎ出し 永断
未練ない世間であつて死にきかず 笑司
新築へ世間黙って居てくれず 増美
世間知らずと意見をされた頃愉し 柳宏子

兼題「泣き顔」

若本多久志選

世間見ず僅な事で直ぐ怒り 井平
世間など気にして居ぬイランク 水堂
今にして闇が続いている世間 一乃字
本心を世間話のように言い 栗
思春期へ世間はなしにして訓し 奈良子
身体を張った恋にも世間口を入れ 満潮
よろめきをやつ世間の眼でささえ 生々庵
給料日前の世間は水臭し 梅志
世間並につき合いをしてよく残し 一步
改心を世間素直に受取らず 高史
はらませておいて世間を気にし 鶴汀
愛人と添えぬ世間が憎らしい 武助
世間様が世間様かと心細り 古方
長いものじゃあれよとまかれてした 生々庵
俺の世間はほんの一丁目一番地 路郎
世間様かアハハと父は笑つとき

泣き顔が鏡の中で慌てて居 一傘
泣き顔は嫌いと無理に笑わされ 好子
本当に好きかと泣いた眼が尋ね 高志
泣き顔へてるてる坊主雨にぬれ 文秋
泣き顔を見せて借金断られ 静馬
アルバムの泣き顔これが私です 進之助
泣き顔の前に咲いてた月見草 十悟
泣き顔をかくしジンタの夜は更ける 奈良子
泣き顔を乳ふくむ子に見上げられ 一瓢
泣き顔になつてぼそぼそ自供する 青風
痴話喧嘩涙拭かせてけりとなり 文秋
泣き顔のそれから女強気なり 旅風
泣き顔でおどせば甘いパパであり 漣
玉葱を切る泣き顔は笑い出し きさ子
泣き顔へ生きたらぬコンバクト 漣

泣き顔をおとす変えて申辞すみ 義弘
泣き顔は見倦いてますと執達吏 満秋
泣き顔が母を見つけて声になり 周甫
泣き顔を残しテープ木に 浮き 連
泣き顔をかくす仕草の汗をふき 旅風
泣き顔を見られてからの気の弱り 柳宏子
泣き顔を隠す小袖のなまめかし 与呂志
泣くもなか泣き顔だけの元氣な子 繁雄
泣き顔も見せぬ愚妻に励まされ 茶仏
泣き顔になつて櫓つて手が震るえ 梅里
泣き顔になつて櫓つて手が震るえ 梅志
泣き顔になつて女の去に 支度 木客
泣き顔も見せず五人の子が育ち 麦稻子
泣き顔のまま大きな菓子へ手をのびし 葉乙女
泣き顔へ決心をしたバフを当て 潮花
泣き寝入りした児の泪拭いてやり 葉光
泣き顔を見られたくない牡丹刷毛 梅里
泣き顔のやり場庭下駄突つ掛ける 圭井堂
横顔は泣いているよなサンドマン 三林坊
泣き顔で花緒の切れた下駄をさげ 句念坊
たびたびの泣き顔聖天さんもたまさかや 生々庵
泣顔へ首を振つて扇風機 摩天郎
慟哭へ號経の高く低く和し すゝむ
泣き顔になったを刑事見逃さず 満潮
おぼろの泣き顔税務署持て余し 夢路
半泣きの顔で三振もどつて来 阿茶
勘忍どつて泣き顔お見せして 三林坊
泣き顔で夜店は雨の荷をたたみ 一瓢
泣き顔へすらすら運ぶ公益社 圭井堂
泣き顔になり処女ですわ処女ですわ 多久志

兼題「改札」 正本水客選

顔なじみ切符と新聞置いて行き 岳詩
上役はあれだ改札先に行く 一進
改札のバチバチバチ空を打ち 一傘
改札へちよこさん坊や待つており 勝彦
改札へ割込み財布すられとり 越舟
終電は出たと改札をつけなく 梅里
就職を改札口も知つてくれ 葉光
リニクサツ改札口を押し出され 美音子
改札の十月松茸がさがされる きさ子
一二等改札口から区別され 笑司
あの改札コセやと不正見つけられ 一三天
改札をぐずつていて家出知れ 半休
改札を出てから荷物持ち替える 葉光
改札で遅れた妻を待合せ 紫香
改札のパンチ途切れて持直し 茶仏
改札を無札で抜ける趣味を持ち 永断
改札を出てデパートに足を向け 南宗
改札をまともに通れぬ程に肥え 十悟
改札はいと悠々ときりはじめ 三司
改札の鉄持ちたい子が通り 葉光
改札も一歩さがつた閨屋の荷 潮花
改札へ一人残して先に行き 南宗
改札の朝のパンチは音もよし 庸佑
改札をはさんで名残りつきなり 奈良子
改札を出ると嬉しい彼が待ち 多久志
定期券ほんまに見てんのかと思ひ 与呂志
改札で出向えの傘探すふり 宏子
子沢山改札抜ける術を覚え 永断
改札でまた生水を母案じ きさ子
改札も初免の客へあたかし 一三天
見送らな済まん改札口で去に 幽谷
改札を出てから家出恐くなり 牧人
改札で羽織の衿を直される きさ子

改札が始まったのか動く列 連
母連れて改札の眼にいたわられ 木客

兼題「口ぐせ」 小川恒明選

口ぐせがほんまになった自殺記事 文秋
口ぐせと判つていても腹を立て 南宗
時ところかまわずおぼろなままだ 十悟
口ぐせもなつかし母の子守唄 梅里
ふた言めには貧乏のよさを言う 木客
口ぐせは小伴だけの立志談 いさむ
名士ともなれば口ぐせ真似られる 十悟
口ぐせもスターとなれば流行語 増美
口ぐせもあって先生親しまれ 柳宏子
又しても儲かりまつかが出てしまひ 狂二
口ぐせに言つとききと氣を持たせ 茶仏
もうやめるやめると言うた酒で死に 六童子
口ぐせもマスコミに載る小西節 奈良子
口ぐせを知つたおうちアクセント 浪速子
口ぐせが出るほど病氣回復し 木堂
口ぐせは学生気分が抜けて居す 淡舟
口ぐせは真似て声帯模写で食べ 梅里
女房の口ぐせ飲んで来はんや 梅里
自炊して母の口ぐせ思い出し 奈良子
口ぐせを抜けば短い叱言なり 求女
口ぐせがまだ耳にある二た七日 一瓢
かた言にママの口ぐせ真ねる 奈良子
口ぐせとしろベコベコ札を言い 梅志
口ぐせとしろノモアヒロシマ どんたく
口ぐせは四角四面なことばかり 伸生
口ぐせに長嶋程になれと言ひ 一步
口ぐせをなつかしんで一周忌 水堂
口ぐせも言うて届ける尋ね人 静馬
口辯もそのまま母の便り来る 生々庵

口ぐせも生きているなり時の人 恒明

席題「集金」 西いわを選

話込んだあげく集金ことわられ 生々庵
集金の抱きつうきつう抱き 南宗
集金へ居留守の下駄を見付けられ 牧人
集金がよりまへんねと断られ 繁雄
集金へ長い手形を恩にきせ 牧人

大阪市民文化祭
第十回川柳大会

日時 昭和三十三年十月十九日
(日) 11時開場入場無料
会場 毎日新聞大阪本社講堂
(市電桜橋)

講演 「明るい川柳生活」
岸本木府

席題 当日二題発表
「大阪と川柳」
麻生路郎

兼題 「商売」選堀口塊人

兼題 「群集」選中岡三吉

兼題 「水」選中島生々庵

兼題 「親友」選近江砂人

川柳賞 大阪市長・教育委員長より贈呈

兼題投句 各題毎に郵便はがき一
枚に二句づつ明記大阪市
北區中之島・大阪教育委
員会内 市民川柳大会係
宛(十月十日着限ノ切)

(主催) 大阪市・大阪市教委
関西短詩文学連盟
大阪川柳連盟

(後援) 毎日新聞社

おべんちん言つて集金座り込み 茶 仏
集金に來れば会社はもう潰れ 茶 仏
集金の帰る夜道が恐くなり 句 念坊
はかどらぬ集金マダム自身が来 薰風子
集金にすっぱりとした靴をはき 梅 志
集金は女の方がよく集め 庸 佑
集金の度に何かとごてる客 悦 子
お愛想がいいので集金いいそ 恒 明
集金の二度目は犬も吠えつかず 紫 香
集金へ今若乃花立上る 満 潮
集金を逃げてまんねと遊びに来 文 秋
払う気が無い集金へよく喋り 麦 稻子
集金かいなと奥へ消えたまま 文 蝶
こんど行く時に払うと断わられ 茶 仏
集金の愛嬌マダムべつにもち 梅 志
集金の今日は居る戸の軽るさ 葉 乙女
三度目に來た集金は腹を立て 三 司
集金の目あてになつた地蔵尊 晃
集金のゆきも帰りも夜行なり 仲 生
義理のある集金女にゆかせとき 舟 遊
集金の半端は気前よく返し 梅 志
カナリヤを褒めて集金脈があり きさ子
息子はんに払つてさうと此処もまた 恒 明
集金はいつでに寄つたことにする 鵜 汀
喧嘩とは知らず集金額を出し 水 堂
大口の集金飛行機で帰り 博 也

席題「売店」 土井文蝶選

売店へ奥伝と言う花を活け 葉 乙女
扇風機において売店人が居ず 水 客
大阪の売店で買う京みやげ 進之助
売店の客を連れ去る免車ベル 鵜 汀
売店で一冊買つて旅に出る 鵜 汀

売店の人も感づく待ち合せ 恒 明
入れ替へる日は売店も落ちつかず 圭井堂
売店で先ず一本は立飲みし 紫 香
目的はたばこではない地下売店 六 竜子
本ものへ売店濡れたままのつり 三 司
売店に母ちゃんがいる文化祭 増 美
売店は五千円札透して見 句 念坊
売店の隅でこんぶの酢がかわき 葉 乙女
吊れるだけ吊つて売店顔が見え 葉 乙女
売店が素通りさせぬ生ビール 狂 二
しもた家であちこち売店もつており 阿 茶
小遣儲けと言う売店に養われ 梅 里
アリバイに売店で買う旅土産 狂 二
改装をしたが売店売れが落ち 庸 佑
親の気も知らず売店並んで居 水 堂
売店は儲けたらしい音で閉め 六 竜子
入場料はど売店で子に食われ 一 三 天
売店で新生を買い初発出る 武 助
売店でなじみの刑事茶をもらい 博 也
売店の電話の方がよくはやり 博 也
ラムネ冷えきつて売店開らしい 一 三 天
ブロマイドの人氣売店なら替へ 文 蝶

席題「女連れ」 松江梅里選

女連れをそろそろ夕餉気にかかり 葉 乙女
女連れビールぐらいへためらわず 水 客
カナリヤへ耳かたむけた女連れ 操 子
女連れお好焼の快気焰 連
デパートへ回る積りの女連れ 武 助
玄關でどつと笑つた女連れ きさ子
横隊で道一杯の女連れ 豆 秋
女連れ何度も何度もさようなら 求 女
女連れ特価売場で子とはぐれ 文 蝶

占いにわてもわてもと女連れ 葉
後座が馥郁として女連れ 旅 風
女づれ試食したまま買わずに 葉 乙女
あるだけの愚痴をならべる女連れ 恒 明
パラスルにもう秋が来た女連れ 梅 志
女連れ七拾円をよつて乗り 葉 乙女
女連れ少しは弥次らしい気持 柳 宏子
毛せんの端へこぼれた女連れ 梅 志
惣気たり惚けられたり女連れ 梅 志
女連れどうせナイトの気でお供 旅 風
食堂へ喋りつかれた女連れ 葉 光
おトイレに開かかつて女連れ 葉 光
女連れ恐れわごわ値段つけてみる 梅 志
女連れ記念写真の位置でもめ 求 女
女連れ御酒も一本だけののみ 古 方
割勘を卓で押合う女連れ 井 平
挨拶は廊下で受ける女連れ 水 客
女連れよろめく事も話合い いわを
女連れ塗つて叩いてよく喋り 梅 里

川維 ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起報

五十年今日の目がある友 白 髪 峯 円
この白髪君若かりし日もありき 魔花麗
白髪まだ本当の齡を云い 誤り 草 一郎
口だけが達者になつて白髪ふえ イツヨ
仲裁は白髪頭に物言わせ 緑 風
白髪染しなびた顔を如何します 柳 葉
また逢える日を楽しみに送別会 泉 水
めつきと殖えた白髪に秋を知り エス子
白髪などものはや気にせぬ停年期 砂 丘
再婚の見合白髪に氣をつかい 坪 山

川維 にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志選

不審火へ第六感の目が動き 進之助
大火早や復興へ樋音鋸の音 六 竜子
丸焼へ位牌をもつて逃げただけ 蘭
棒立ちになつて我家の火事を見る 晃
すてこのはき換へも持つ火事見舞 五色
大観の富士は茶の間の絹団扇 淡 海
正札で買うと団扇を二本呉れ 清 人
しぶうちを竈を煽ぐ様に出来 青 風
旅艸先ずウイスキー入れておき 柳 宏子
酔うて來てスリートになるウイスキー
だんじりへおちこちとよいと言われても
商魂も入れてだんじり派手になり 文 秋
盛り塩を崩しだんじり通り過ぎ すゝむ
空の旅群が雲を斜に抜け 北 州
浮雲が一つ 青空 更らに 青 凡 九郎
女房に今年もはげた浴衣きせ 悟 朗
小払いの次々と来る妻の留守 堀 子
洗濯の白さを妻に感謝する 雄 声
倦怠期妻に知性が無い如く 太 路
呼出した妻へ混線する電話 玲 人
先妻と比べられてタスキがけ 敏 子
靴すべり妻にたずねた空模様 連

逆らつて呉れず淋しい妻になり 梅志

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

ほとときほつときと抵抗ききめなし 笑司
貫祿が抵抗軽く捌くなり 十悟
背を向けて女抵抗のありつたけ 六竜子
沈黙の抵抗壁に馬鹿と書き 増美
ことごとこにこつと当るものを持ち すすむ
台風に負けるもんかと屋根の草 豆秋
熊蜂の抵抗に堪う花唇 亜鈍
無料の酒呑んで二次会おごられ 繁雄
明日は明日さ無料宿泊所 立見
只で見るテレビは腰がだるくなり 文秋
戦災の裸同士が結ばれる 奈良子
妙な処あさを見つけた素ッ裸 句念坊
裸もう女の線になつて いる 朱人
割切つて一糸まとわずモデル台 やなぎ
スードもうカメラの列に恥らわす 舟遊
臍出して故郷の井戸へ久しぶり 薫風子
日の丸をあげた裸はよい男 唯義
かくすべきとはかくして スードの美 太路
関取の腕にジヨツキも小そう見え 青風
ピヤガーザジヨツキへ赤い灯がうつり 庸佑
ピツケルのでまえてブルにも乗れず 清人
ピツケルへ帽子をかけて昼に 一三夫
差し上げたピツケル槍を背に写し 堰子
会費など忘れスードを写す会 川柳堂
小蟹らはかなわぬまでも缺立て 喜仙

川維 淀川句会 (大阪市)

武部香林選

空腹に汗は遠慮もなく流れ 葉光

床柱来るまで空腹待たされる 陽子
挨拶はどちらでもよしすきつ腹 文児
空腹がベストセラーを生んでくれ 三十郎
退け時の空腹狙う屋台の灯 六竜子
濡衣をさせられてゐるごんたの子 水堂
PTAごんたひとりに集められ さきす
ガラガラガチャごんた一番先に逃げ 東洋男
夫婦してごんたのお詫びして廻り 幽谷
腕はくち素つ破ぬかれたモーニング 若菜
おくるみをごんたですと嬉しがり 香林

川維 たまつくり支部句会 (大阪市)

清水白柳子報

次男坊西瓜畑の番さされ 井平
お土産の西瓜タクシー呼ぶ重さ 清子
尺あてて西瓜切りたい子 沢山 一栄
ストローへ米西瓜の種が 寄り 文秋
行きつけの店がマッチで妻に知れ 柳宏子
防火デーマッチ憎まれ役になり 貞句朗
手廻いの中でマッチが燃えつきる 凡九郎
いらだつて探せばマッチ空ばかり 白柳子

川維 明和病院支部句会 (西宮市)

西尾青一路報

抵抗と別に女体の燃えはじめ 丹話
サックドレス石の地蔵のした顔 策平
ことごとく抵抗したいのも若さ 留三
親類に見離なされて出世をし 光子
海山を越え来て親類ただ涙 義子
思ひやりある親類は資力 無く すみ江
親類の噂をもつて見舞客 夢路
親類の金に薄情な利子がつき 風遊
天引で我が家を建てた秘訣談 青一路

立ち飲みで課長の悪口言つて呑み 球絵
言訳になれて貧から抜けられず 寿栄
言訳の次の言葉待ってやり 東雲
言訳を教えて呉れて誘惑す 園男
親類で借る請判を他人がし 舟遊
抵抗はしないと矢張り抵抗し 三舟
言訳はいらん事だと社長云う 三舟
言訳は封じる物に金があり 鬼美
言訳は肚におさめたふところ手 善坊
無意識にこぼんだ夜の寝つかず 川太郎
ジャスミンの香りで言訳ささかれ 栗
無抵抗主義という奴もつてをり 栗
盲愛が灰色にした子の一生 知司
父性愛只黙々と稼いでる 一杯
惜しみなく奪つて愛に海のなく すむ
ひよつこり位牌の人が帰つて来 文女
当然が奇蹟にされて不服なり 芦舟
信仰の奇蹟ベッドへ売りに来る 知司
相談の余地を残して酒にする 球絵

川維 出雲支部句会 (出雲市)

原章峰報

宿直の蚊帳にころがる一升びん 章峰
夜行ふと目覚め網 確める 雲平
独身寮蚊帳はくるくる丸められ 夜洲男
深夜まで語り尽さない久し振り 独仙
ふと覚めて海の底なる蚊帳の色 壮
新人へ奮起を望む根気よき 代仕男
新人へ課長の急所教えとき 重信
新人が社長の甥で気が使われ 朱紅
深夜メーターの中で言訳考える 章峰
第二作もう新人でない批評 万古人
新人に押されベンチの日が続き 岬月

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選

悪友が都合も聞かず押しかける 文峯
都合などどうでもすると好き同志 初穂
大國の都合で一億踊らされ 喜天
都合して米ますと外へ出たものの 無鬼
語り手が上手お化けに見えて来た 枝葉
怪談へ捨てた仔猫が気にかかり ゆたか
怪談へ何を見たのか犬が吠え ひか平
大見栄を切つた筈のが帰郷する 雅佐安
帰郷して未だ坊ちゃんと呼んで よし子
孫が寝てからの帰郷の夜が更け 永断
図々しい拘摸が裸になつて見せ 秋月
どん底は裸を売って生きており 岳詩
寮住い訪えば裸がオオと云い 峰月
半休で帰れば妻も子も裸 左文字
仁王さん裸の力もて余し みのる
あつけのう裸になられせいがなし 一雨

川維 鳥取支部句会 (鳥取市)

河村日満選

妻すがた妻に見とれる青すだれ 丈夫
砂浜で四肢をのびた娘のポーズ 丈夫
どっこいそうはさせぬと魚大あはれ 享
足音を聞いて岩蟹すべり落ち 秀和
夏姿わが娘女を感じさせ 粗粒
本当のさしみの味を浜で知り 多可志
蟬取りへパンツ一つの子もまじり 星影
浴衣着てゐるに課長さん課長さん 三歩
浜つ子の威勢に神輿舟に乗り 耕民
ノータイの二人へビビり盛り上り 若人

夏姿も一度妻に惚れ直し 湖山
浜育ち都会の風がきつすぎる 八歩
風雲急へ一人増やした特派員 日満

川 雑 倉敷支部句会 (倉敷市)

梶原一善選

お月様レンズで詩情もなくみられ 谷水
今だけは隠れて欲しいお月様 麗水
奥さんも猫も熱さにうだつとり 一善
お月様失意をくつきり地に浮べ 銀子
うだれうだれと水屋儲けとり 平平
幕合を見合にされて落着けず 狂風
十田の意地で別れた植木鉢 鈴文坊
外見を捨ててやつぱりウドンにし 隆月
子の演技幕が下つてはつとする 鳳月
寄附金が直接幕の字に響き 香春
二階借り植木針へも茄子を植え 幽谷
うどん屋も給料前と知っており 陽子
植木針子供以上に可愛いがり 三吉
お月様が見て居るからと断られ 創七
お月様見ては嫌やよと行木し 萌芽
素うどんでよい財布に氣を使い 春也
ウドンずき口から胃までついで居 さまさえ

川 雑 備前支部句会 (岡山県)

三村柳風子報

復活へ旧知の顔がまた揃い 柳風子
復活の苦労女房と分ち合い 三六
実感が出て客席は昂奮し 一声
作文にその貧乏があふれてい 幸仙
実感が出すぎて噂の立つ地芸 自娘句
実感に迫り隣の手を握り 正州
実感をこめて歌っている音痴 駄流児

倅は不幸の愚痴へピンとこず 万女
社会科の先生がよく酒を飲み 清春
舞鶴で十年振りの泣き笑い 流風
お説教隅でいねむりして戻り あやめ
野心まだもえて世間の隅で生き 東岸
言い訳をすればする程腹が立ち 竜泉
言い訳をすまいと思う男意地 浄美

川 雑 小松支部句会 (小松市)

伊藤茶仏報

グラス触れあつて愛憎隠し合い 錦水
ハイボールだけのグラスでまだねばり 宗太郎
洋酒のグラスに紅が染まりそう 茶仏
色ように添つてグラスの味が有り 正明
うつむいてばかり見合のグラス透け 一進
晩酌にこれつきりかとグラスなめ 寅之
熔接の光り深夜の空を切り やすえ
酔い足りた足は深夜の街を縫い 松水
お帰えりか深夜何やらくを巻き 吉枝
尺玉をねらうシャツター秒さむ 正柳子
仕掛けだらうと縁台の遠花火 城南
生活の苦労忘れて持つグラス 美乃留

川 雑 岡山支部句会 (岡山市)

津田麦太楼報

御先祖は何であらうと金が出来 東岸
幽霊が出そうな道を母危篤 万女
世帯持ち豆腐半丁取っておき 矢寸志
灯明の下へねずみの尾をのぞけ 幽谷
酷寒で高野豆腐の出来のよき 仁斉
冷奴二人の箸がからみ合い 葵丘
御先祖の趣味の屏風を立てて病み 麦太楼
家庭不和灯明あげるのも忘れ 秋月

現金と聞いてそろばん入れ直し 陽子
幽霊の足がのぞいている楽屋 尚子
そろばんを立てて商談成立し 美沙
辻つまの合わぬ先祖の自慢きき 半翁
小払いに妻算盤の玉に触れ 仙坊
安静の夕餉スプーンに乗る 奴美舟
幽霊がもの言いそうな応答の絵 一声
算盤玉四ツになつてから破産 喜楽
よきにつけ悪しきにつける先祖 雅風

川 雑 京都支部句会 (京都市)

田中島雀報

事故もなく深夜の街灯ねむたそう 九角
ふれないで下さいものへ触れたがり 親生
手ざわりのうなずき合うて生地といふ 司郎
汚いと思えば汚いべんざりさんを撫でる 鳥雀
箱を入れ替えた洋菓子だとわたり 紫蘭
友仙洗う水の上なる花模様 古要
ながれ星人工衛星かるとわれ 千潮

川 雑 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

嵐にもあけず出掛けるランデブー 夢太郎
修学旅行が降りて嵐が去つたよう 水雲
欲情の嵐へ女乳房抱き 七面山
人工の化粧でかもし出す色香 南鯨
包めども色香こぼるる青春期 雅風
色も香もまだ十八と言う匂い 美沙
衰えた色香ルージュに頼りきり 竜児
汽笛の音消えて面影だけ残り ちとせ
雨煙る谷間に遠く汽笛の音 寿子
青い空獄舎の窓にのしかかり 周甫
獄舎もう二度目の秋を告げる虫 知恵美

更生を誓う獄舎の冷たすぎ 銀子
後悔は獄舎の隅にうすくまり 薄仙
叱られて泣き顔なおす水鏡 早苗
水鏡髪なでつけて逢いに行き 喜楽
水鏡苦勞を耐えた髪をなで 耿介
耐えて来た涙を洗う水鏡 たつよ

川 雑 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花選

包丁のリズムでナマスだと思ひ 豊年
今日からは貴女と呼べる仮住居 翠月
夜遊びのあんな処に顔がきき 半休
グーの音も出せぬ古傷指紋帖 天作
嬉しい日の声が台所からはずみ 六花
十代の夜遊び大人の真似をする 実男
重そうな稻穂農薬効いている 佐吉
地蔵様かつぎ込まれた嬉しい日 丸平
包丁がリングへ錆をつけてむげ 箔川

川 雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選

弁解は通さず頭から此り 酔羊
老妻に死なれて頑固さゆるんで来 そと枝
つき合えば一徹悪い人でなし 恒雄
新漬へ新妻甘い塩加減 一路
新漬がうまいいうまいと病み上り 光郎
新世帯母新漬も持参させ とよ
あら糠に替えて胡瓜の味で出し 味平

川 雑 高知支部句会 (高知市)

川竹松風報

蟬がらの様に背をチャック止め 未遂
スタイルの採点をして涼み 台風舟

子が泣いて柱の角は叱られる 水客
転動へ水も変ると親心 実子
スタイルを氣に冬を着る 真子
面影もなく四十の妻が肥え 山里
水遊びたらいの中に靴もあり 幸陽
新しい水着で浜を見て 帰る 素
臨終の水へ身寄りの手が震え 狂声
新婚の頃は氣儘も聞いた人 守
芥川賞から氣儘な書つぶり 温夫
嫁がせてからも氣儘な娘を案じ 一人
雨降に訪えば女は素顔なり 柳翠
男下駄もう独身でないらしい 古城
停年もない老妓の握る三味 松風
苦はないが子供が欲しいとある日記 春子
子の頭撫でて再婚思い切り 酔雀
それから女男をあてにせず 俊一郎
噂もう覚悟の女静かなり 蟠蛇
男なら乗れない筈の満員車 彩泡
午睡からさめて女を取戻し 竹比呂
女手に育てられたとは見え 迷窓

杏林川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選

胸の内明かす勇氣も出ず 嫁ぎ 瑞川
親が来て急に勇氣を出して泣き 瑠枝郎
剣つくへ股をくぐるの勇氣なく 一哲
ノーと言う勇氣がなく引張られ 一伸
清貧に耐える勇氣はほろにがし 生々庵
いいたい事いえる勇氣をほめて 小石
人知れぬ勇氣で妻のヒスに耐え 生々庵
底抜けの間抜けへ腹も立てられ 小石
間抜けめとおこる亭主が傘忘れ 瑞川
女房が良くて間抜けが尚目立ち 比呂史
算盤を持てば間抜けの顔でなし 生々庵

持つべきは金抜け作へ美人が来 阿茶
上げて見りや餌はとられたまになり 一哲
三枚目間抜けの顔が役に立ち 阿茶
間抜けの顔も出て来る社長室 太希志
欲ばつてどれもう上手にならぬ芸 阿茶
欲ばつては景品ついた方を買 比呂史
おやつ持つ妹兄に近よらず 同
米一俵かついだ闇屋逃げられ 瑞川
欲ばつて見た二本立眼がいたみ 小石
欲のない人ねと女房氣に入らず 比呂史
米ンともに世界を支配し度い腹 瑠枝郎
欲張つた土産はパスでもてあまし 生々庵
欲張りがもつたと言ひ添える 同
告別式もすんでいるに見舞が来 同
不合格の電話勇氣を出してかけ 同
間抜けめと一喝されることに馴れ 路郎

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

小沢史葉報

細胞がこればと思う荷をかつ 草右
税務署は細胞とても見逃さず 春雄
四十年添うた夫の細い腕 幸男
美人だが八頭身の細い腕 桃村
細胞のペンに輝く直木賞 夏生
大ジョッキで乾杯細胞腕ばかり 兎風
後妻来てから細胞のはり切りよう 方正
細胞に銀環不平まだ つづき 風船堂
細胞へぶら下る子がまた産れ 没食子

南海電鉄川柳会 (大阪市)

友淵貴山報

空梅雨で西瓜の音も良くひびき 句念坊
ビニールの蚊帳で西瓜が育てられ 昭月
お愛想も言わぬ才女にしかれど 梅志

その上に才女は美人におわします 貴山
才女しばし貧乏忘れ筆をとり 狂二
高給をとって才女はまだ未婚 旌風
無駄の無い言葉に才女だと思 同
七光り才女のはまれ高い記事 武助
ちよびりと才女の夢をもちめ 武助
パトロンがついて才女は洋行し 貴山
菊池賞受ける才女に 遠い縁 玲人
船底の鯛はやっぱり別にされ 昭月
原稿紙才女の夢もくずれがち 昭月
才女だと言われ夫にたよれなく 昭月
才女となりて我が道はけわし 宏子
才女と言われ奥様失格し 同
才女と言われ奥様失格し 同
才女も顔が買われた女秘書 泉秋
才女振り主人の影が薄う見え 句念坊
フラッシュへ笑う才女の東ね髪 玲人
先輩に才女を列記する学院 同
才女でも恋にはやっぱり弱い 圭木
三代目才女の嫁で持直し 句念坊
二日酔才女の妻を煙たがり 雅男
好きな人一人も作らない才女 梅志
才女で恋の悩みを歌に詠み 狂二
才女だという評判へ疲れ切り 武助
夢声老たじたじ小顔なり才女 梅志
オカッパで才女はじをカバーする 貴山
洋画入選そんな才女であつたか 路郎

333川柳会 (堺市)

川村好郎報

貧乏は嫌いと妻のひとり言 好郎
月に恋打ち明けている独り言 南宗
割勘でしようことなしに祝うとき 雄声
祝盆は淑女もチョット口をつけ 三休
心から祝う一人が隅に居る 葉光

祝酒女房もたすきかけて受け 狂二
今日迄の精魂祝う句会の灯 六竜子
奇蹟でも起らんかいな大あくび 雪山
奇蹟まだ信じ切れない目の動き 圭木
あてにした奇蹟起らず夜逃ける 一菜
奇蹟だったと思はもう忘れ 好郎
優勝は奇蹟といわれても嬉し 冗歩
耐えて来た不幸の連続だ過去 梅里
草野球連続エラーで勝負つき 新石
加茂川に冷したビールで高うつき 貴山

たけるべ川柳会 (岡山県)

野々口美舟報

即答のイエスへ仲間面喰らい 青柿
横顔の魅力が妻を忘れさせ 只世
金のある人に銀行貸したが 一喜
赤帽に家出のわけを尋ねられ ちとせ
院長がハンドルをもちよく 山彦子
赤帽にみんな持たせた銀狐 美沙
銀行へゆくへそくりの市場籠 美舟
握られて振り切る事の出来ぬ恋 七面山

鮎と料理と酒

アベノ橋地下映画食通街

千日前 ⑦〇一四七

梅里の店

大萬

★大万川柳(第九十二回)を募る
兼題「方角」路郎先生選
締切・十月十五日 (句数五句以内)
発表・十月廿一日 (店内掲示)
投句は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

☆ 大阪市民文化祭行事

(短歌文学関係)

恒例の行事を左の通り開きます。詳細は各新聞並に各福祉誌上の予告及連盟の案内等により御承引の上市民文化興隆の爲絶大の御協力をお願い申し上げます。

- 第七回 短歌大会 十月五日(日) 毎日新聞社講堂
 第二回 詩の大会 十月十八日(土) 読売新聞社講堂
 第十回 川柳大会 十月十九日(日) 毎日新聞社講堂
 第六回 俳句大会 十月廿六日(日) 朝日新聞社講堂

主催 大阪市民文化祭実行委員会
 後援 大阪府・大阪市・大阪府教育委員会
 関西短歌文学連盟

正本水客・黒川紫香・丸尾潮花著

川柳句集

三人

定価 二百円
 送料 二十四円
 B列6号
 二百余頁

本書は規定出版の機会を逃した川柳句集に入らぬもの
 予言に達し次第第1号より第10号までから出版された。

句集刊行に就いて

路路門の逸村、正本水客、黒川紫香、丸尾潮花の三氏が川柳精進三十年の収穫の中から特に優秀なる作品を選出し、恩師麻生路郎先生の校閲を経て弘く世におく、その真価を問うため来る十月中旬を期し、川柳句集「三人」を刊行することとなつた。

三氏は小学時代の同期生であ

るが、社会に出てから異なる職域に就いても絶えず親交を続け、趣味も亦趣をならべて川柳に遊び早くより川柳不朽洞会員として二十有五年の歳月を斯道の研鑽につとめられたことは柳界にも稀に見る存在である。かかる三氏が元就の故智に做い協力して一巻の句集を編むことは三氏三態の異色のある作品に光彩あらしめ且つ読むもの

をあかさない点で最良の方法ではないかと思う。

三氏の作風については既に定評があるので今更喋々を要しないところであるが、木客氏の作品は常に高度の句品を保ち、その旅行吟の如きは特に優秀で、読者をして氏の句境に共に浸るおもいをさせられるものである。紫香氏の作品は情味に富み、特に氏のケイ眼による動物吟の如きは他氏の容易に追いつき容さぬものがあり、潮花氏の作

★出版予定日・昭和三十三年十月中旬、五百部限定出版
 につき御申込は早く★御送金は川柳雑誌社の振替口座
 大阪七五〇五〇番を御利用が便利です(切手代用可)

発行者 川柳「三人」刊行会

発行所

大阪市住吉区万代西五の二五

川柳雑誌社

電話 住吉六八〇八一
 振替口座 大阪七五〇五〇

新兒童音楽サークル

募集

バイオリン科・アコーディオン科・チェロ科
 ギター科・ピアノ科・楽典科・音楽科・音楽教育科

成人日(夜間)も設けています。詳細は当サークルで規則書をお求め下さい。



奈良県生駒市町三丁目一〇三番地(若月)
 申込所 新兒童音楽サークル
 電話 生駒二七番

講師 大坂放送音楽専門学校 麻生アトシ
 大坂放送音楽専門学校 徳主
 大坂放送音楽専門学校 渡辺真
 大坂放送音楽専門学校 市川弘
 毎日放送音楽部 市川弘

printed in Japan

(禁録載)

川柳雑誌 第十号

定価 六〇円
 (送料四円)

昭和三十三年九月廿五日印刷
 昭和三十三年十月一日発行

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五の二五番地
 電話 住吉六八〇八一
 振替口座 大阪七五〇五〇

募集

課題吟募集

清水白柳子選
 大西八歩選
 三鴨笑選
 武部香林選
 弘津柳慶選
 岡田夜潮選

歌手選
 八百屋選
 近作柳樹選
 川柳塔選
 章(評論・研究・感想其他)

毎号募集

投稿規定

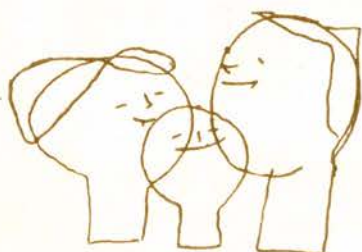
投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する。

「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募集する。

「課題吟」は誰でも投稿し出す。

「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限り。

一家そろってホーライ党



廣東料理



大防なんば・TEL ⑤551—2



馥郁たる香りと共に
色艶の良い毛を養いましょう

伝統と不断の新研究を
高き香の中に生かす

養毛料なら

三共の本格的養毛料 (強力女性ホーモン入)

ヨットニック

フケ、カサミ、抜毛、薄毛、落発の防止、美髪保存に
¥150、¥250、¥420、¥1,000



皮膚病の中で一ばん多い

湿疹

くさ・ただれ・あせも

- ★カユミをすぐとり、掻くの忘れろはどです。
- ★慢性・頑固症にもよく効きます
- ★カブレず、ベトつかず、クリーム状で爽快です

ゼム



東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌



IWATANI

お台所で
きつと重宝!

すぐ使える便利な
ポータブル・ガス



簡単なつめかえでもいつまでも使用になれるマルキプロパンは、経済的でしかも完全に気化するので安全で、配管から中毒の心配もありません。入替ガスはお電話一本で迅速に配達

マルキプロパンガス

ガス業歴32年 岩谷産業株式会社
本社 大阪市東区本町3 電話大阪通代表5251・8251